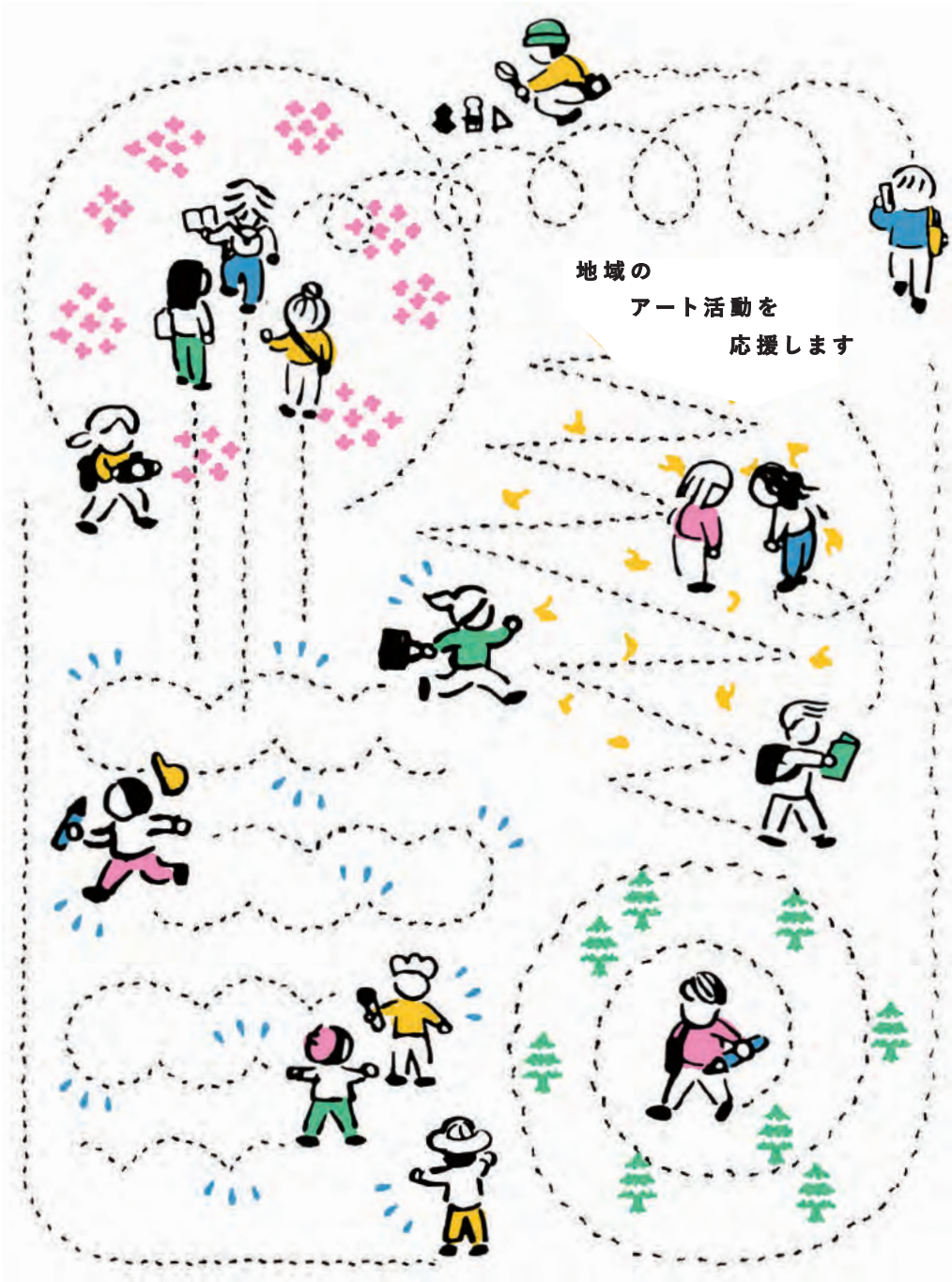
ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site



2020実施レポート

ヨコハマアートサイト2020とは

横浜市地域文化サポート事業「ヨコハマアートサイト」は、
地域課題の解決にアプローチするため、
文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動や、
横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

公募概要

対象期間：2020年7月～2021年1月

対象となる活動：以下のいずれかのテーマを含み、
横浜市内で実施される美術、映像、音楽、舞台芸術などにかかわる文化芸術活動。
（期間中、不特定多数が参加できる催しが含まれていること。）

3つのテーマ

アートフェスティバル

アートを通じて
地域資源の魅力を引き出し、
開催地域内外のにぎわいを
創出するもの

コミュニティアート

アートを通じて
福祉・環境・街づくり・国際交流等
における地域課題に
アプローチするもの

アートプロジェクト

横浜の歴史や自然、景観などに
着目し、アートを通じて
横浜の魅力を
市内外へ発信するもの

助成金額：活動資金は1件につき10万円~200万円を助成します。

ただし、これまでに開催実績がある継続活動は原則、助成対象経費の2分の1以内の助成となります。
また、継続して助成する期間は、5年を目安とします。
（6年目以降も申請は可能ですが、採択の優先度は低くなります。）

ヨコハマアートサイト2020選考委員会
（順不同）

古賀桃子（特定非営利活動法人 ふくおかＮＰＯセンター代表）、
北野央（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）、
藤川悠（茅ヶ崎市美術館 学芸員）、
砂連尾理（振付家／ダンサー、
立教大学 現代心理学部・映像身体学科 特任教授）、
原美紀（認定NPO法人 ぴーのぴーの　副理事長・事務局長）

外部の有識者で構成されたヨコハマアートサイト2020選考委員会により選考を行いました。

目次

活動報告（団体名50音順）

2 アーティストネットワーク＋コンパス
会社まるごとギャラリー2020

4 NPO法人あっちこっち
アート・フォー・コミュニティ～アートが人と地域コミュニティをつなぐためのステップ事業～

6 磯子区障害者地域活動ホーム
あいさつシリーズVOL.2 浜マーケットからこんにちは

8 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会
カドベヤ・オープンＤＡＹ―つどおう・かたろう・つながろう

10 WeTT 実行委員会
We Trees 鶴見 The Base

12 大岡川アートプロジェクト実行委員会
大岡川アートプロジェクト「光のぷろむなぁど2020」

14 音楽スペース　おとむすび
おとむすび「トークショー」

16 黄金町BASE
黄金町BASE

18 ことぶき「てがみ」プロジェクト実行委員会
ことぶき「てがみ」プロジェクト

20 さかえegaoプロジェクト
さかえegaoフェスティバル

22 STAND Still
性暴力サバイバー　ビジュアルボイス

24 蒼昊美術會
広げよう！深めよう！！水彩でアートの輪!!!

26 ＮＰＯ法人打楽器コンサートグループ・あしあと
こころに響く打楽器作っちゃお♪

28 都筑アートプロジェクト
パラダイスから遠く離れて
～土地の記憶に刻まれるアート～

30 ティーンズクリエイション組織委員会
「ティーンズクリエイション2020」

32 東横フラワー緑道フェスタ実行委員会
東横フラワー緑道映像ワークショップ

34 TalkingKidsHi5
トーキングキッズハイファイブスクール！“しゃべろう、うたおう、おどろう、つくろう！”

36 Picture This Japan
Picture This 2020：横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト

38 特定非営利活動法人美術保存修復センター横浜
未来に繋ごう、皆んなの!!横浜の!!歴史・文化・芸術!! ～朽ちていく、再生、修復～

40 病院と地域の協働によるおまつり実行委員会
病院と地域とアートでつくるおまつり

42 本牧こどもディスコ実行委員会
本牧こどもディスコseason6

44 「街のはなし」実行委員会
「街のはなし」

46 横浜キネマ倶楽部
ロケ地で映画を鑑賞しよう！！聖地巡礼上映会『1999年の夏休み』in大倉山記念館（港北区）&『風のある道』in神奈川県立音楽堂（西区）

48 横浜下町パラダイスまつり実行委員会
横浜下町パラダイスまつり2020＋よこはま若葉町多文化映画祭2020

50 横浜シネマネットワーク実行委員会
全国ミニシアター地域交流上映会　横浜×尾道

52 一般社団法人横浜若葉町計画
若葉町ウォーフ「まちなかギャラリー2020」

54 LITTLE ARTISTS LEAGUE
LITTLE ARTISTS LEAGUE YOKOHAMA～アートを通してグローバル思考を育むプログラム～

ヨコハマアートサイトラウンジ

56 佐藤信さん（一般社団法人横浜若葉町計画）

58 藤井本子さん（「街のはなし」実行委員会）

60 藤山ヅルさん、スズキクリさん（横浜下町パラダイスまつり実行委員会／Art Lab Ova）

62 横山千晶さん（居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会）

会社まるごとギャラリー2020

天野浩子作品「海の記憶Ⅰ」
展示「㈱冲セキ」

アーティストネットワーク+コンパス

連絡先

URL	http://www.anc3434.com
TEL	045-785-3434
E-mail	info@anc3434.com
Facebook	https://www.Facebook.com/Anc3434

団体紹介

任意団体「アーティストネットワーク+コンパス」のスタッフ及び、外部アドバイザーを通じて企画・運営。金沢区福浦界隈の工場地域にて特有の地域性を生かした活動展開。場所の不利を有利に活用しての発信、近隣会社・工場の繋がり、拡大を目指し、協力工場が増える見込み。

会期　2020年9月26日～10月31日

会場　【金沢区】山陽印刷株式会社など協力工場13社の社屋内外
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　上野彰子、川名マッキー、小川敦子、天野浩子、松尾玲央奈、コントオル、竹本真紀、岡典明、田中清隆

来場者数	1,200人
主催	アーティストネットワーク+コンパス
後援	金沢区役所
協力	山陽印刷株式会社、株式会社坪倉興業、株式会社山装、鶴見金網株式会社、有限会社協和タイヤ商会、株式会社中込製作所、株式会社ヨコハマ機工、東海シヤリング株式会社、有限会社竹内紙器製作所、株式会社共立紙器、株式会社武居商店、株式会社冲セキ、株式会社HIGASHI-GUMI
実施イベント	9月26日～10月31日：会社まるごとギャラリー2020WEB作品展示、会社まるごとギャラリー2020屋外作品展示

オンラインでも楽しめる
工業地帯をめぐる
アートギャラリー

松尾玲央奈作品「Please choose …」
展示「鶴見金網㈱」

竹本真紀作品「ラックのキオクを集める旅」
展示「㈱武居商店」

田中清隆作品「ReBorn Egg」
展示「㈱HIGASHI-GUMI」

金沢区の工業地帯で得た廃材を利用した作品を、工場や会社に展示するプロジェクト。8回目となる今年はコロナ禍に向けて、テーマを「世の中を明るく元気に楽しませる」に設定しました。タイトルは「Reborn＝リボーン」。この苦境から学び成長していけるようにという願いが込められています。

参加者はインターネットでダウンロードした地図を見て工場地域を周遊し、工場のまわりに展示されたアート作品を鑑賞しました。ふだんは訪れる機会の少ない工業地帯もアートと融合することで宝探しのように楽しめる場所になります。

例年行われていた、ワークショップやギャラリーツアー、オープン・クローズパーティーなど対面での参加者との関わりはコロナ禍の影響で断念せざるを得ませんでしたが、この状況下でも楽しめるように工夫が凝らされました。ひとつは、ウェブサイトでのオンラインギャラリーです。「WEB でまるギャラ」と題しておうちでも展示を楽しめるように作品の写真が掲載されました。過去の展示作品のアーカイブもまとめられ、展示に足を運べなかった人たちからも大変喜ばれました。

また、密を避けるために作品の展示は屋外のみに絞りました。木材が幾重にも連なった大きな作品や、金属で出来た双葉が土から芽ぶいているような作品など、屋外ならではの作品が集まりました。屋外という環境では日々の見回りが必要でしたが、その記録をSNSにアップすると反応が得られました。感染症対策でメイン会場を設置しなかったことが功を奏し、例年メイン会場に集まりがちだった客足が分散したため、工場を周遊してほしいという本来のねらいも実現出来ました。

回を重ねて地域での知名度も上がり、開催を楽しみにする声もたくさん届きました。協力企業の数も着実に増えています。今後も工場をはじめ、地域とのつながりを強めていくことを目標に活動を続けていきます。

アート・フォー・コミュニティ
～アートが人と地域コミュニティをつなぐためのステップ事業～

ハロウィンコンサート

NPO法人あっちこっち

連絡先

URL	https://www.acchicocchi.com/
TEL	090-1261-1308
E-mail	info@acchicocchi.com
Facebook	https://www.facebook.com/npoacchicocchi
Twitter	https://twitter.com/npoacchicocchinpoacchicocchi

団体紹介

2011年設立(2013年法人化)。芸術文化を通して地域社会と住民、アーティストをつなぐ活動をしています。交流イベントやワークショップの企画・制作他、国際交流事業なども行っています。「第9回かながわ子ども・子育て支援大賞特別賞」受賞。

会期　2020年7月1日～2021年1月31日

会場　【中区】麦田地域ケアプラザ、大谷家電、津ノ国屋材木店
※主にオンラインで開催

参加アーティスト　楢原いちご、田中愛実、降旗真理子、藤川玲菜、于景

来場者数	642人
主催	NPO法人あっちこっち
共催	麦田地域ケアプラザ
協力	麦田町発展会、大谷家電、株式会社津ノ国屋材木店
助成	公益財団法人パブリックリソース財団 J-Coin 基金
実施イベント	8月3日～8月10日：ミニチュア版ムギーとギータを作ろう！その1、9月14日～9月18日：ミニチュア版ムギーとギータを作ろう！その2、10月3日～10月10日：ミニチュア版ムギーとギータを作ろう！その3、10月10日：ムギーとギータのクリスマスコンサート撮影、10月14日：ムギーとギータのハロウィンコンサート撮影、10月20日：ムギーとギータが教えるコロナウィルス感染防止対策ムービー撮影、10月31日：ムギーとギータのハロウィンコンサート配信、11月29日：ムギーとギータのクリスマスコンサート配信、12月1日：ムギーとギータが教えるコロナウィルス感染防止対策ムービー配信

親子でつくるキャラクター「ムギーとギータ」で地域を彩る

クリスマスコンサート撮影風景

クリスマスコンサート

ムギーとギータが教えるコロナウイルス感染防止対策ムービー

今回の実施拠点である中区・麦田町では2年目の活動となります。昨年は地元在住の子どもの参加が少なかったため、より地域に届けたいという思いから、今年度は親子向けのイベントも企画しました。

「ミニチュア版ムギーとギータを作ろう！」では、美術家がデザインした町の妖精キャラクター「ムギーとギータ」のミニチュア制作キットを販売し、親子が家で作り方動画を見ながら制作する企画にしました。

作ってもらった作品は持参してもらい、ハロウィンやクリスマスのコンサート、コロナウイルス感染防止対策ムービーなどに登場させ、映像配信につなげました。キャラクターの知名度を上げることができるとともに、一年を通してつながりのあるイベントにすることができました。また、動画でのイベントだったため映像として残るものとなり、参加者が作った町のキャラクターの動画や制作キットは今後も使っていただけることになりました。コミュニティとのコミュニケーションの一助となり、若手アーティストが地域と直接つながる機会としても、コンサートは意義深い機会になったと感じています。

一方、動画イベントだったため参加者の顔が見えず、どのような方が動画を見てくれたのか分からず目に見える成果は制作キットの購入者数と動画の再生回数のみで、成果や効果の体感を受け止められなかったのは残念でした。

今年度はコロナ禍で多くのイベントが中止になる中で、地域での取り組みができたのは、地域の組織・麦田町発展会と前向きに話し合うことができたからです。地域貢献できるイベントに今後は力を入れていきたいという発展会からの話を受け、すでに来年度の企画を進めています。対面でのイベントには不安も残りますが、何年も続けて行えるアート企画でできる地域貢献の形を考え、持続可能な仕組みを考えることが課題だと考えています。

あいさつシリーズVOL.2
浜マーケットからこんにちは

浜マーケットからこんにちは

磯子区障害者地域活動ホーム

連絡先

URL	http://npo-arata.yokohama
TEL	045-751-7055
FAX	045-751-7054
E-mail	npohama2007@ybb.ne.jp
Facebook	https://www.facebook.com/isokatuevent/
Twitter	https://twitter.com/Isogohama

団体紹介

「磯子区障害者地域活動ホーム」は、様々なハンディキャップを持った人達が集まるコミュニティです。日々「あんなこといいな！できたらいいな！」を妄想しながら、泣いたり、笑ったり、ドタバタしながらも豊かな過ごし方を探し、生命力をぶつけています。

会期　2020年11月2日～2021年1月31日

会場　【磯子区】磯子商店街商業協同組合、磯子区障害者地域活動ホーム、NPO法人夢・コミニティ・ネットワーク【金沢区】武松商事(株)エコクルファクトリー【南区】地域活動支援センターたんぽぽ、南福祉ホームむつみ【港南区】港南福祉ホーム
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　おどるなつこ、大山田千弘、メッセンジャーズ、塩田久人、ERECTLOGIC、いそかつ

来場者数	180人
主催	磯子区障害者地域活動ホーム
協力	磯子商店街商業協同組合、武松商事株式会社、NPO法人夢・コミュニティネットワーク、障害者支援センター（社会福祉法人横浜市社会福祉協議会）、生活介護支援事業所のびやか
実施イベント	11月2日～11月8日：いそかつ製作所、11月3日：廃材楽器製作ワークショップ、11月4日：オンラインワークショップあしおとの輪、12月4日：オンラインワークショップ記録動画公開

障害のある人もない人も
歴史のある商店街に
ごあいさつ

武松商事株式会社アップサイクル企画
「廃材楽器づくりワークショップ」

オンラインタップダンス

いそかつ製作所

磯子区障害者地域活動ホームでは当事業で、これまで、アートを通じて障害のある人も、そうでない人も垣根無く関わり、支える／支えられるという関係ではない相互的な関係が生まれていくことを目的に活動してきました。

今回の企画では、磯子区の商店街・浜マーケットの中にある公共スペースを拠点にして、地域の人たちにあいさつをすることから始めました。そして、商店街のご店主やお客さんなどと顔を合わせながら、イベントに向けた準備を進めていきました。当日は「いそかつ製作所」と題して、イベントスペースに装飾をつけたり、屋台を立てたり、メンバーの描いた絵のカレンダーを配布して商店街を盛り上げました。商店街をモチーフにした大型ぬりえ看板を設置すると、近隣の子どもたちがやってきて一緒に色付けを楽しんでくれました。

また、イベント内では「廃材楽器製作ワークショップ」を行いました。ミシンの糸巻きの芯や、プラテープ、ベッドのスプリングや缶のキャップなど、ふだんはガラクタと呼ばれるモノたちが素敵な楽器に変身しました。最後に完成した楽器をみんなで演奏し、楽しいひとときを共有できました。商店街や地域の人々から、またイベントを行って欲しい、明るくにぎやかに人が集まる機会になったとの声を受け取りました。

今年はオンラインでの取り組みも行いました。コロナ禍で多くの福祉施設がイベントの中止を余儀なくされている中、オンラインならば実施できると考え「あしおとの輪」と題してタップダンスのワークショップを行いました。声をかけると全部で6 つの団体が参加してくれました。当日は盛り上がって最後には一体感が生まれ、みんなが笑顔に包まれました。参加者は束の間の非日常を味わうことができたと、とても好評でした。オンライン化がなかなか進まない福祉業界で新しい様式を取り入れる機会になればと期待しています。

カドベヤ・オープンDAY
―つどおう・かたろう・つながろう

皆で自分のタグを作ろう

居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会

連絡先

URL	https://ameblo.jp/kadobeya2010/
TEL	090-4722-8001
E-mail	chacky@keio.jp

団体紹介

居場所「カドベヤ」の目的は、様々な背景を持つ人々がともに日常を過ごす場所を提供することです。「芸術的な表現を使ってコミュニケーションすること」と「共に食事を作り、食べ、片付けること」を通して創造的な生き方を他者との共存の中で模索しています。

会期　2020年7月7日～2021年1月26日

会場　【中区】居場所「カドベヤ」、寿町健康福祉交流センター

参加アーティスト　赤津正人、厚地美香子、シャー・勝間田・真理子、寒川明香、瀬野美佐、手塚千鶴子、徳永彰、松元康太、湊祐典、若狭英雄

来場者数	285人
主催	居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会
助成	慶應義塾大学教養研究センター部門内調整費
後援	慶應義塾大学教養研究センター
協力	コトラボ合同会社、一般社団法人地唄舞普及協会、黒沢美香＆ダンサーズ、The Dance Times、認定NPO 法人あっちこっち
実施イベント	7月7日～9月22日：そろりカドベヤ、9月29日：こども食堂とアート体験、10月6日：4月からの私、10月13日：ハロウィーンの切り絵を作ろう！、10月20日：「創造力とコミュニティ」研究会、10月27日：こども食堂とアート体験、11月3日：自分のtagを作ろう、11月10日：結ぶ・つながるからだの冒険、11月17日：「創造力とコミュニティ」研究会、11月24日：こども食堂とアート体験、12月1日：「創造力とコミュニティ」研究会、12月8日：心静かにお茶を点てる、12月15日：消しゴムハンコを作ろう、12月22日：こども食堂とアート体験、12月29日：カドベヤの行く年くる年、1月5日：カドベヤの書初め、1月12日～1月26日：そろりカドベヤ

いっぱい動いていっぱい食べて健康と精神を守るアートな居場所

ハロウィーンの切り絵を作ろう

からだとこころの冒険

「創造力とコミュニティ研究会」
パンデミックの中で自分と向き合う

さまざまな背景を持つ人の居場所として開き続けてきた居場所「カドベヤ」は今年で10 年目になりました。人とのふれあいの中で居場所を育んできましたが、コロナ禍においてみんなで身体を動かしたり、共に食事をとることが世の中では困難になりました。緊急事態宣言下では閉室というかたちをとった時期もありましたが、任意でスペースに居ることはできるようにしました。それは真に居場所を必要とする人たちのためでした。家に居場所がない、まともに食事をする場所がないという参加者のため、また参加者の健康や精神の見守りのために、感染対策を徹底したうえで小さく場所を開きました。

今年度の取り組みテーマであったコミュニティ・ダンスについて、慶應義塾大学の実験授業の実施は不可能となりましたが、カドベヤのワークショップの中でシリーズとして開催することが可能となりました。毎月１回ずつのペースで、コロナ禍で受けた心身の思いをみんなで身体を使って表し、それを受け止めるというワークショップを行いました。特に身体的距離をとりながら、ダンスというツールでつながる方法を模索できたことは、今後のワークショップの手法としても踏襲したいと感じています。

感染症の拡大が下火になった頃からは人数を制限し毎週火曜日の居場所の運営と夕ご飯の提供を再開できたことに加え「創造力とコミュニティ」研究会を３回開催できました。この研究会での議論は、コロナ禍での芸術と居場所の意義を考え直す機会を与えてくれました。そして10 月から認定NPO 法人あっちこっちとの協力で、寿町健康福祉交流センターにおいて「こども食堂とアート体験」のイベントの運営に月一度かかわることでカドベヤの運営のノウハウを外部に活かすことができました。また、10 周年の記録として報告書も作りました。

We Trees 鶴見 The Base

キービジュアル
Photo: Hajime Kato

WeTT 実行委員会

連絡先

URL	https://wetrees.net/
E-mail	ts-info@wetrees.net
Facebook	https://www.facebook.com/wetrees.tsurumi
Instagram	https://www.instagram.com/wetrees_tsurumi/

団体紹介

「weTREES　TSURUMI」プロジェクト推進のため、舞台となる小野町通り周辺の町会が参画し設立。かつて高度成長期を支え、多様なコミュニティーが共存する鶴見の町が活気を取り戻し、世代や垣根を超え豊かな関係性を育むことを目指し活動します。

会期　2021年1月21日～2021年1月31日

会場　【鶴見区】鶴見小野駅周辺エリア【中区】象の鼻テラス
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　so+ba、齊藤真菜、原倫太郎、島田篤、Michael Kress

来場者数	10人
主催	WeTT 実行委員会
実施イベント	1月20日：デモンストレーション体験会、1月31日：公式ウェブページ公開

多様なコミュニティの集う活気ある鶴見をアートから取り戻すために

1/20 デモンストレーション体験会、メッセージ発表

1/27 キービジュアル撮影会
Photo: Hajime Kato

1/20 デモンストレーション体験会、全体の様子

We Trees 鶴見 The Base は、鶴見小野駅周辺エリアを舞台に、再び活気を取り戻し、世代や垣根を超えた豊かな関係性を育てることを目的に立ち上げた事業です。海外アーティストを招聘し、リサーチやプログラム実施を予定していました。しかしコロナ禍の影響を受けて、計画の変更を余儀なくされました。2020年9月から随時プログラムを開催し、その後に集大成のフェスティバルを開催する予定でしたが、フェスティバルは2021年10月への延期を決定しました。

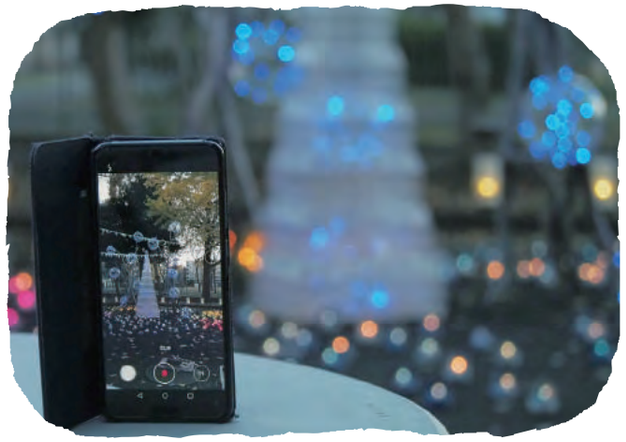
今年度は、まず地域の交流拠点となるコミュニティースペースの整備と運用開始をする予定でした。対面で集まれる拠点の整備を優先しましたが、コロナ禍により、地域のステークホルダーの理解を得るための活動が思うように進まなかったため実現に至りませんでした。

そのため、今後活動を共に推進していく地域のステークホルダーとの合意形成を図ることを目標に、活動主旨の説明と、主要な参加アーティストによるデモンストレーション体験会を行いました。あわせて、情報発信のためウェブサイトやＳＮＳを開設しました。キービジュアルは今後推進するプロジェクトの一つ「Circles and dots」(so+ba)のイメージです。

キービジュアルの撮影で地域を訪れた際、道ゆく人が関心を持って声をかけてくれたり、注目を浴びました。小さくても頻繁に出来事を起こすことで、活動への理解を広げていけるはずだと思います。

一方で、物理的制約を受けつつも懸命なコミュニケーションの結果、地域のプログラムとして、地元中心にとどまることなく、鶴見区、横浜市の理解を得、人的バックアップをいただきながら、本案件を拡張する動きが加速化しています。ここからは資金調達、人材集めともに行政、地元一体となって、他地域／ステークホルダーへの働きかけを行い、まずは2021年度秋に向けて周知をしていく準備に入ります。今年度事業の目標であった拠点形成も継続的に目論見ながら、様々なポテンシャルにあふれた本エリアをかつてない魅力あふれる地域にしていく予定です。

大岡川アートプロジェクト「光のぷろむなぁど2020」



画面越しのオブジェ

大岡川アートプロジェクト実行委員会

連絡先

URL	http://ohokagawaart.blog45.fc2.com/
E-mail	ohokagawaart.koho@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/ohokagawaart/
Twitter	https://twitter.com/ohokagawaart/
Instagram	https://www.instagram.com/ohokagawaart.koho/

団体紹介

吉野町市民プラザが2008年に立ち上げた大岡川アートプロジェクトのメンバー（町内会、近隣公共施設、マスコミ、企業など）が中心となり、2009年に実行委員会を設立し、光のイベント「光のぷろむなぁど」を市民との協働作業で毎年実施する。

会期	2020年12月6日～2020年1月31日
会場	【南区】蒔田公園 ※主にオンラインで開催
参加アーティスト	南区さくらボランティア、aburabito、ふじたおさむ

来場者数	15人
主催	大岡川アートプロジェクト実行委員会
実施イベント	12月6日～12月13日:光のぷろむなぁど2020撮影、1月31日:光のぷろむなぁど2020オンライン

コロナ禍への祈りの光を映像で伝える

木のオブジェとともに

光の中でヨガ

さまざまなキャンドル

2008年に南区・吉田町から南太田界隈の大岡川周辺に光のアートを展開することを目指してはじまったこのプロジェクトですが、今年はコロナ禍のため大きな計画変更を迫られました。

当初は感染症の拡大防止対策を講じながら、例年通りの開催を計画していました。しかし、町内会活動などで蒔田公園の使用を自粛していた地元の人たちの意向を考慮して、会場として想定していた公園を使ったアート作品の展示、コンサート、屋台出店などのイベントの実施は、中止しました。

そのため、これまでの継続性を大切にしようと、過去に制作した作品を再構成して撮影し、南区さくらボランティアの会のみなさんが桜の木で作ったギターの演奏などとあわせ、動画配信する取り組みに切り替えました。限られた空間に作品を配置し、それを動画で撮影して編集する試みとなりました。

当日は公園の一角にさまざまなキャンドルを並べ夜が更けるのを待ち、小さな光のプロムナードを作りました。コロナ禍に対応するために働き続けている医療従事者に向けた応援やお礼のメッセージを込めたキャンドルも制作しました。作品は動画サイトで公開し、多くの方が視聴しました。

これまで私たちは、イベントへ向けた準備を通して町内会や学校、商店、施設などとのつながりを構築してきました。またコロナ禍で発表の機会がなくなった団体に対して、作品発表の場を提供するという主旨での期待も寄せられていましたが、それも叶いませんでした。今まで行なってきた公園でのアートイベントにこだわらない発想も必要になるかもしれません。

アートを通して地域と地域、地域と人のつながりを作ることが、私たちの活動目的です。コロナ禍でそうしたつながりの必要性は再認識されはじめています。対面での活動として実現できなかったのは残念ですが、ふたたび活動を前へ進められるように取り組んでいきたいと考えています。

おとむすび「トークショー」

おとむすびトークショーvol.1
「地域をつなぐ音楽の話」

音楽スペース　おとむすび

連絡先

URL	https://www.otomusubi-yokohama.com/
TEL	070-4343-6698
E-mail	otomusubiyokohama@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/otomusubi.yokohama/

団体紹介

「おとむすび」は町の音楽サロンとして2019年にオープン。来所のきっかけ作りに、歌や楽器のサークル、ミニライブ等を定期開催する。音を介した緩やかなつながりや、その人らしい音楽参加に向けて、メンバー（音楽療法士）がファシリテートしている。

会期	2020年11月7日～2021年1月31日
会場	【泉区】音楽スペース　おとむすび ※主にオンラインで開催
参加アーティスト	米田佐知子、三宅博子、本間克之、赤羽美季

来場者数	84人
主催	音楽スペース　おとむすび
実施イベント	11月7日:おとむすびトークショー パート1、1月31日:おとむすびトークショー パート2

音でむすぶ
音と考える
人と地域の未来

入口看板とちらし

おとむすびトークショーvol.1
「地域をつなぐ音楽の話」

おとむすびトークショーvol.2
「地域をつなぐ音楽の話パート２」

おとむすびは、人と音楽をむすぶ、音楽で人と人をむすぶというコンセプトで、2019年に地域の音楽サロンとして泉区にオープンしました。多様な人たちが「音楽する」という共通の目的で同じ場所を共有することによって、ゆるやかな接点が生まれることも期待しています。

場所に足を運んでもらうきっかけづくりの企画を続けた前年度を受け、住民同士のニーズの発掘、多様な住民の共生に向けてこの場所が果たせる可能性について、トーク企画を２回行いました。

１回目は「住民の多様性と地域での居場所づくり、そのために音楽が出来ること」がテーマ。子ども・子育ての中間支援の専門家と音楽家が登壇しました。スペースに来る人の意識が、消費者としてサービスを受ける感覚にならないよう「地域の居場所」をゆるやかに保つための工夫について、事例を交えて議論が行われました。人の心の垣根を超え、短い間に距離を縮められる、音楽の場に期待が寄せられました。

２回目は、フリーペーパーの編集長と音楽家によるクロストーク「コロナ禍で私たちができること」を行いました。「ひとりひとりが大きな影響力を持った存在なんだ」という思いを、プログラムだけではなくさまざまな形で相手へのメッセージにつなげていくことが重要だとの意見が出ました。

オンライン形式で少人数の会でしたが、市内の福祉関係者や地域のボランティア団体、近隣住民の参加もありました。遠方の方や時間的事情、移動手段の都合のある方にも扉を開けたと考えています。

終了後にオンライン会議室を開放していたところ、残った方が自発的に情報交換などを行い始め、自主的な交流が生まれていたのも、うれしい成果でした。自ら発信したい参加者も多かったと思われるので、今後はボトムアップ的な活動を展開したいと考えています。トークショーという形態は今後も検討していきます。

黄金町BASE

黄金町BASEでものづくりをする子どもたち

黄金町BASE

連絡先

URL　https://www.koganechobase.com/
E-mail　koganechobase@gmail.com

団体紹介

2016年、アーティストの山田裕介、杉山孝貴、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター元職員の水谷朋代、李智希の4人によって設立。どんな子どもでも自身の創造性を発露する場が必要である、という信念のもと、本事業を通して地域コミュニティの新たな在り方を提案する。

会期　2020年7月4日～2021年1月29日

会場　【中区】黄金町BASE
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　山田裕介、杉山孝貴

来場者数	202人
主催	黄金町BASE
協力	黄金町エリアマネジメントセンター
実施イベント	7月10日～1月29日：黄金町BASE

子どもとアーティストが廃材とアートを通して出会い、未来につなぐ

黄金町BASEでものづくりをする子どもたち

黄金町BASE 2Fスペースで集う子どもたち

黄金町BASEで生まれた作品

黄金町エリアにアトリエを構えるアーティストたちの協力で集めた廃材を利用し、子どもたちが自由にものづくりができる場所を作るプロジェクトです。集まる子どもたちの主体性を重視し、アーティストは指導者ではなく子どもたちを手助けする存在として位置づけられています。

コロナ禍で活動を継続するか、リスクをどう考えるかは悩みました。一方で子どもたちから「場を開けて欲しい」という声も多くあり、このような時だからこそ開く意義があると考え、開催日を週1日に減らしてのべ24日、運営を行いました。自由にものづくりをする「かいだん広場」での活動に加え、昨年整備した2階のスペースで子どもたちが勉強をし、本を読み、ゲームをして集う場づくりもできました。

子どもたちがつくった作品の一部は、成果発表としてオンラインで公開しました。物理的に作品を保管するのには限界がありますし、でき上がった作品を子どもたちが持ち帰るケースも多いため、オンラインで記録を残していきたいと考えています。また発展的なアイディアとして、それぞれの作品にまつわるストーリーを、プロジェクトを運営するアーティストから見た視点で文章にし、作品写真と一緒に掲載することで「記憶」を残していけないか検討していきたいです。

今年度は、黄金町以外の場所に出かけてワークショップを行う「出張BASE」の実施や、アーティストを招いたワークショップ企画は断念しました。その一方で、青少年育成活動・ボランティア活動支援のよこはまユースと連携し、夏休み期間の高校生ボランティアの協力を得られました。

運営メンバーを取り巻く環境には開始当初から変化があり、安定的に運営をしていくために、どのような体制で事業を継続していけるか検討していきます。また出張BASEの運用を軌道に乗せるための方策も考えていきます。

ことぶき「てがみ」プロジェクト

てがみ〈男性篇〉
「青空ポスト」1

ことぶき「てがみ」プロジェクト実行委員会

連絡先

TEL　045-651-2602
（ことぶき共同診療所デイケア）

FAX　045-651-2602
（ことぶき共同診療所デイケア）

団体紹介

互いの思いや記憶を「聞きあうこと」から始めたい。精神保健福祉に関わる様々な立場の人間たち（演劇関係者、ことぶき共同診療所デイケアスタッフ、地域の支援者）で団体は構成されている。寿町を拠点に自己肯定感や生きる力を育む場づくりに貢献していきたい。

会期　2020年7月1日～2021年1月31日

会場　【中区】寿町健康福祉交流センター、若葉町ウォーフ
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　花崎攝、都田かほ、松尾慧

来場者数	1,109人
主催	ことぶき「てがみ」プロジェクト実行委員会
協力	医療法人ことぶき共同診療所、若葉町ウォーフ
実施イベント	9月26日：てがみ～女性篇～のぶえさんとよしえさんのてがみ、12月12日：てがみ～青空ポスト、10月3日～1月31日：発表会録画配信

てがみを書く・読む・聞く演劇プロジェクト

てがみ〈男性篇〉
「青空ポスト」1

てがみ〈女性篇〉
「のぶえさんとよしえさんのてがみ」1

てがみ〈女性篇〉
「のぶえさんとよしえさんのてがみ」2

ことぶき「てがみ」プロジェクト実行委員会は、ことぶき共同診療所デイケアのメンバーや、横浜中区寿町に繋がる人たちと、「てがみ」を書く・読む・聞くワークショップを開催しました。手紙を書く相手は過去の自分や、もう会えなくなった人までさまざまです。そこで書かれた「てがみ」をもとに構成された演劇作品を発表しました。

9月はデイケアに関わる支援者の女性2人に焦点をあてた「のぶえさんとよしえさんのてがみ」を上演しました。彼女たちの人生の節目に触れながら、物語が進みました。12月はデイケアに通う男性たちによる「青空ポスト」が上演されました。大切にしていたモノや、心に残っている人へ誰にでも届けてくれる青空ポストへ投函される手紙のお話しです。

ワークショップでは参加者に、これまでの人生や今の生活のことまで、さまざまなことをお話ししてもらい、スタッフがそれを聞きながら演劇の構成ができていきます。デイケアに通うメンバーのワークショップでは、プロジェクトのスタッフとデイケアスタッフが連携を取りながら、体調に配慮しながら丁寧に話を聴きました。劇中で読む手紙も参加者自身で書き上げます。

コロナ感染症防止対策として、客席を設けることはできませんでしたが、録画配信というかたちで上演を続けました。その結果、寿地区で働くさまざまな職種の方、他の精神科デイケアでも録画配信を観てもらうことができました。

デイケアメンバーにとって、自分の思いを安心して語り、病の有無を問わず、話を聞いてもらう機会は大変貴重なものです。医療の役割では負い切れない個人のさまざまな思いを、あたたかな他者のまなざしの中で語れることは、大変に有意義なことであったと思います。今後も、精神疾患を持つ方々を中心に参加者の体調に留意しながら、プロジェクトを進めていきます。事業の継続のためにオンライン化も視野に入れています。

さかえegao フェスティバル

たまねぎの皮を使った草木染のワークショップ

さかえegaoプロジェクト

連絡先

URL	http://ega-oproject.com/
TEL	045-392-7601
FAX	045-392-7602
E-mail	chikatuegao@wind.ocn.ne.jp
Facebook	https://www.facebook.com/sakaeegaoproject
Twitter	https://twitter.com/egaopj1

団体紹介

区内福祉事業所様々なアーティストや賛同する個人が集いアートを楽しみながら沢山の人、場所と繋がりながらアートイベントを開催しています。

会期　2020年11月1日～2021年1月31日

会場　【栄区】わーくくらぶ・さかえ、豊田小学校、栄区生活支援センター、地域活動支援センターegao、本郷台キリスト協会、栄スポーツセンター、パンとカレーの店ぷらさんぬ、合同会社つながるわ
※主にオンラインで開催

参加アーティスト　岡典明、川本みつこ、松本光世、ASAD、高橋寛行、石黒陽子、栗原俊子、カイフチエリ

来場者数	3,000人
主催	さかえegaoプロジェクト
後援	栄区役所
実施イベント	12月1日～12月18日：We×artist わーくくらぶ×川本みつこ、12月14日～12月18日：We×artist 豊田小個別支援学級×岡典明、12月20日～12月25日：We×artist 栄区生活支援センター×松本光世、11月12日～1月31日：お家でワークショップ パイスケをつくろう、11月16日～1月31日：お家でワークショップ △と□で形を作ろう、11月20日～1月31日：お家でワークショップ 草木染に挑戦、11月1日～12月28日：パフォーマンス、1月15日～1月31日：オンラインミュージアム、1月23日～1月31日：オンラインegaoフェスティバル

オンラインに集まった たくさんの作品 栄区から届ける笑顔

アーティストと子どもたちの想像から生まれた魚たち

三角や四角で自分の街を表現するワークショップ

クラフトテープでブローチづくり

8回目を迎えた「さかえegao フェスティバル」はコロナ禍を受けオンラインを中心に展開しました。

パフォーマンス作品の公募には、さまざまなジャンルや年齢層から16作品の応募がありました。そのうち13作品は出張撮影で対応しました。出向くと「引きこもりがちだったが、コロナへのおそれから、ますます外出ができなくなってしまっていた」「人との交わりを求めていた」などの声が聞かれ、多くの人が人とのふれあいや発表の場を求めていることを再確認しました。配信映像には実際のステージのようなMCも入れ、さらに臨場感を出しました。

一般公募したアート部門では、小・中・高校生から大人まで、障害のあるなしにかかわらず例年と同様に103作品の応募がありました。絵画、造形、映像など多岐にわたった作品の中には、今回のテーマである「あなたの街　どっち？　あっち？」のテーマに即して地域を愛し紹介する作品や、遠く大阪からの出展もあり、今までとは違う出会いもありました。

福祉事業所とアーティストがコラボレーションして作品を作る「We ×artist 展」のワークショップでは3か所に出向き、製作に取り組みました。参加者の慣れた場所や素材でアーティストと作品づくりを楽しむことができたほか、会場に来づらい当事者の方々もゆっくり作品を楽しむことができました。

自宅で製作を楽しめる「お家でワークショップ」ではアーティストによる染色、パイスケ（竹かご）、マグネットを題材とした三作品の映像を配信しました。予想より反響があり、参加した方の映像提供をもとに「作ってみた」映像をあわせて配信するなど、ワークショップの新しい方法に出会えました。

アート作品のみならず全てのコンテンツへのコメントを集める機能を使い双方向性を高め、ステイホームを十分に楽しめるフェスティバルを提供できました。次年度以降はオンラインを大切にしつつ、対面でも開催したいです。

性暴力サバイバー　ビジュアルボイス

ワークショップの様子

STAND Still

連絡先

URL　https://standstill.jimdofree.com/

団体紹介

団体のメンバーは性暴力サバイバーである。公に実名で顔を出して語ることはリスクが高い。安心安全なフォトワークショップ写真の展示を通じた啓発と社会への提言により参加者が自らをエンパワメントする。同時に写真展を通して他のサバイバーへ希望を届ける。

会期　2020年7月11日～2020年12月12日

会場　【青葉区】男女共同参画センター横浜北（アートフォーラムあざみ野）

参加アーティスト　公募で集まった性暴力サバイバー写真家

来場者数	88人
主催	STAND Still
協賛	Picture This Japan
実施イベント	7月11日、8月1日、8月22日、9月12日、10月3日、10月24日：フォトワークショップ、11月29日～12月12日：写真展、12月12日：ギャラリートーク

写真の背景にある性暴力サバイバーの思いを届ける、感じる

STAND Still 性暴力サバイバー
ビジュアルボイス写真展2020 チラシ

ギャラリートークの様子

メンバー作品「ベンチから、続く道」
photo：Nobu

STAND Still は、さまざまな背景や被害体験を持つ性暴力サバイバーたちが中心となって立ち上げた団体です。写真という表現方法を通して自分と向き合い、表現できる場所としてフォトワークショップを実施し、その作品の展示を行っています。活動の目的は、性暴力サバイバー自身による安全な自己表現と相互エンパワメント、性暴力サバイバーの思いを社会へ発信、啓発することです。

全６回のワークショップの中では、まず講師より示されたテーマに沿って撮影を行います。同じテーマであっても、参加者によってテーマの捉え方は異なり、それぞれの個性が現れます。次に、展示する写真の選定を行います。自分で撮った写真の中から、今度は誰かに伝えるための作業として選定を行います。組み合わせや順序によって見え方が大きく変わったり、ストーリーが生まれることもある重要な作業です。また、写真展に出す、出さないという選択も参加者に委ねられており、それぞれの向き合い方が優先されました。最後にキャプションの作成です。もう一つの作品ともいえる言葉。何度も推敲を重ね、慎重に選ばれた言葉が並びました。写真展では、ギャラリートークも行われ、撮影した本人たちの思いを聞く機会となりました。それぞれの写真の背景にある経験や、それぞれの人生にとって写真がどのような意味をもったのか、さまざまな角度から語られました。性暴力サバイバーのみならず、多くの人にとって貴重な時間となりました。

性暴力サバイバーには自由な行動が制限される方もいます。さまざまな状況下のサバイバーに繋がるために来年度はオンラインの更なる導入や対面以外での手法を模索していくことが課題です。

また、プロジェクト自体は２年目となり運営のノウハウが身についてきたため、新規ワークショップの開拓や、横浜の人権に関わる団体との連携も視野に入れつつ可能性を広げていくことを目標としていきます。

広げよう！深めよう！！
水彩でアートの輪！！！

ワークショップ「水彩で描くws ハガキでつながる横浜の海と空」の様子

蒼昊美術會

連絡先

URL	http://sohkoh.art.coocan.jp
TEL	045-232-4341
FAX	045-232-4341
E-mail	sohkoh-art@nifty.com
Facebook	https://www.facebook.com/art.suisai/

団体紹介

蒼昊美術會は水彩を20年近く研究する会員が集まります。また公募展の審査には外部審査員による審査で学芸員・美術評論家・水彩作家による審査です。水彩の魅力を横浜から発信していきたいと考え、日々研究しています。

会期　2020年8月1日～2020年11月22日

会場　【中区】神奈川県民ホールギャラリー、アトリエみずの絵、横浜市民協働推進センター、デイサービスぱれっと、なか区民活動センター【西区】にしとも広場
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　成澤朱未、広瀬美帆、川村良紀、浅野康則、王凱、土方明司、味岡義人、猿渡紀代子、森下隆　ほか蒼昊美術會会員会友

来場者数	1,258人
主催	蒼昊美術會
後援	神奈川県、神奈川県教育委員会、横浜市文化観光局、横浜市教育委員会、公益財団法人横浜市芸術文化財団、神奈川新聞社、神奈川新聞厚生文化事業団、tvk（テレビ神奈川）
協力	アトリエみずの絵、O!MORO LIFE プロジェクト
実施イベント	8月1日、8月8日、8月9日、8月14日、8月29日：水彩で描くwsハガキでつながる横浜の海と空、8月10日：ボランティアws、11月10日～11月15日：第5回公募かながわ水彩ビエンナーレ展第1部、11月16日～11月22日：第5回公募かながわ水彩ビエンナーレ第2部、11月20日：ギャラリートーク、11月20日：シンポジウム 横浜と水彩そして今展示を考える

水彩画の魅力を
オンラインでも感じる
リアルで体験する

会場の様子

ギャラリートークの様子

シンポジウムより

蒼昊美術會はワークショップや展示を通して水彩の魅力を横浜から発信してきました。定期開催している「公募かながわ水彩ビエンナーレ展」は今年で5回目となりました。1部では作者を伏せて展示された全作品の投票と審査が行われ、2部では受賞作品と作者を公開しての展示が行われました。

今年は初のオンライン展示を試みました。出品者の年齢層が高く、コロナ禍で外出できない方も多かったので大変好評でした。最高齢の方で97歳の方が参加したり、病気を患った方が30号もの大きな作品を仕上げて参加し、ネットで作品を観ることができたということもありました。また、初のオーディエンス審査投票も取り入れ、こちらもオンラインで投票が出来るようにしました。オンラインを導入したことで、より多くの人に活動が広まり、約470名もの人が投票しました。また、これまで関りの少なかった若年層からの反応もありました。

会期の最後には「横浜と水彩――そして今展示を考える」と題してシンポジウムを行いました。横浜に水彩が伝わってきた歴史や、コロナ禍における展示の在り方などが語られました。

水彩を体験したことのない人に身近に感じてもらうための取り組みとして、「水彩で描くWS ～ハガキでつながる横浜の海と空」という水彩のワークショップも行いました。福祉施設や区民活動センターなど、全5か所での開催となりました。コロナ禍により活動の幅を広げることが難しかったので、新規参加の施設は1か所でしたが、横浜市民協働推進センターの新しい会場でワークショップを行うことができました。ワークショップでは、ハガキの水彩紙に、水彩専門の絵の具を使い、サランラップ・塩などを用いた技法で海と空を表現します。参加者はふだんは料理に使う材料を水彩に使うことに驚きながらも、生み出されるさまざまな質感や、選ぶ紙によってもさまざまに変わる表情を存分に楽しみました。

こころに響く打楽器作っちゃお♪

緊急事態宣言後久しぶりのイベントを親子で楽しむ

NPO法人
打楽器コンサートグループ・あしあと

連絡先

URL	http://ashiato-dagakki.jp/
TEL	03-3762-6335
FAX	03-3762-6335
E-mail	info@ashiato-dagakki.jp
Facebook	https://www.facebook.com/ashiato.dagakki/

団体紹介

「子供たちに生の音楽を」をモットーに東京芸術大学卒の池野ひとみを中心に2001年結成。のべ400カ所、4万人の子供たちに打楽器の参加型のコンサートを行っている。
東京近郊のみならず、被災者支援演奏など全国巡回中。

会期　2020年9月6日～2021年1月29日

会場　【南区】浦舟地域ケアプラザ、大岡地域ケアプラザ、ハートフルみなみ、母子生活支援施設くらき、南吉田小学校放課後キッズクラブ、睦母子生活支援施設　睦ハイム【中区】新山下地域ケアプラザ、竹之丸地区センター、中区地域子育て支援拠点のんびりんこ、保育園ぱんぴーな【青葉区】プレスクールあおば【泉区】いずみ野地域ケアプラザ、泉区子育て支援拠点すきっぷ【金沢区】金沢区地域子育て支援拠点とことこ、金沢公会堂【栄区】ひよこの会【都筑区】こどもみらい横浜、新栄地域ケアプラザ【戸塚区】下倉田地域ケアプラザ【保土ケ谷区】今井地域ケアプラザ
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　池野ひとみ、半谷麻意子、神本愛子、浜谷安里

来場者数	1,740人
主催	NPO法人打楽器コンサートグループ・あしあと、ひよこの会、社会福祉法人横浜市福祉サービス協会、新栄地域ケアプラザ、中区地域子育て支援拠点のんびりんこ、みなみ青少年地域活動拠点ハートフルみなみ、保育園ぱんぴーな、いずみ野地域ケアプラザ、泉区子育て支援拠点すきっぷ、新山下地域ケアプラザ、今井地域ケアプラザ、母子生活支援施設くらき、睦母子生活支援施設、プレスクールあおば、こどもみらい横浜
共催	下倉田地域ケアプラザ、金沢区地域子育て拠点とことこ、親と子のつどいの広場ふきのとう、関東学院親と子のひろば おりーぶ、親と子のつどいの広場たんぽぽ、親と子のつどいの広場ままのわ、金沢区役所、南吉田小学校放課後キッズクラブ、竹之丸地区センター
協力	和泉北部子育て支援ネットワーク、泉区民文化センターテアトルフォンテ
助成	神奈川県文化芸術活動再開加速化事業補助金
実施イベント	9月6日～1月30日：こころに響く打楽器つくっちゃお、1月12日～1月26日：mamaコンサート

音楽でひらく
親子の楽しい時間と、
気軽に悩みを話せる場

YouTube チャンネル、Instagram ライブを
ママのおうち癒し時間へ

ソーシャルディスタンスを
保ちながらのホールコンサート

視覚障害児とその保護者、
長きにより当団体と協働

何らかの問題を抱える母親たちに向けて、音楽やアートの力で子育てをもっと楽しいものにするきっかけづくりを目的とした活動を続けています。コロナ禍で彼女たちは悩みを抱えているかもしれない、母親同士もっと話し合いたいかもしれない、情報交換をしたいのかもしれない、子どもたち同士ももっと話し笑いあいたいのかもしれない。そう考えながらも場を設けることが難しく、試行錯誤が続きました。

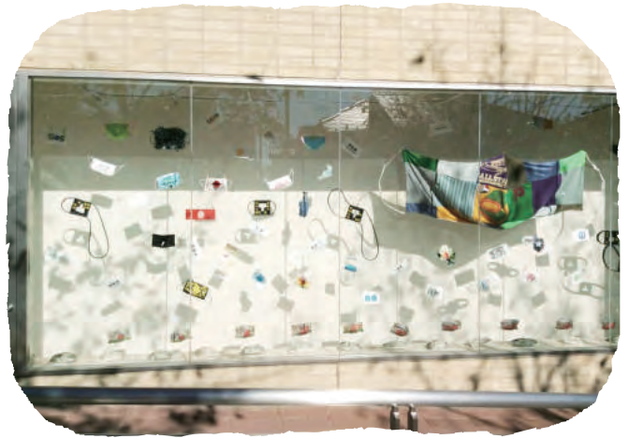
今年度は、放課後キッズクラブや子育てサークルボランティア、視覚障がい児とその保護者の会、学校不登校の小・中・高校生が通う施設、里親家庭や養子縁組家庭の団体、DV からの隔離や経済的困難を抱える母子が生活している施設などと連携しました。

感染症拡大防止対策を万全に行いながら施設側と入念な打合せを行い、親子が安心して参加でき、明日から子育てをがんばろうという気持ちになってもらえるよう努めました。楽器や飾りつけは「おうちでも楽しむコンサート」との一環としてお土産プレゼントとして喜ばれました。

もう一つのコンサートの形としては、団体としては初の試みである動画配信コンサートを行いました。映像の限定公開という形で音楽を届けました。保護者や施設側からも喜ばれ、団体としても新たなファン層との交流により活動の場所を広げるきっかけとなりました。

コロナ禍では母親、保護者、施設側いずれも疲れ切っているように思えました。私たちも事業開催がなかなか決まらず、音楽の持つ力の無力ささえ感じられました。しかし、徐々にこの時代だからできることに向かい各団体と協力しあう中で、母親たちの悩みや状況の把握、アートでできることの感触が見えてきました。対面やオンラインといった形態を変えながらも、子どものこころの成長に向けた音楽の発信を続けていこうと考えています。

パラダイスから遠く離れて
～土地の記憶に刻まれるアート～



ウィンドウアートプロジェクト
ビッグマスク、マスク・マスク・マスク

都筑アートプロジェクト

連絡先

URL	http://tsuzukiart.p2.weblife.me/
TEL	045-974-1363
FAX	045-974-1363
E-mail	tsuzukiartproject.jimukyoku@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/TsuzukiArt/
Twitter	https://twitter.com/TsuzukiArt/

団体紹介

横浜市北部を中心に活動。地域の風景や歴史にアートの視点で関わり、そこに表現を与えて行く活動を通して、地域内外にその場所の面白さを伝え、文化交流の拠点をつくることを目的とした団体。

会期　2020年11月13日～2020年12月27日

会場　【青葉区】赤い家【緑区】緑区民文化センター みどりアートパーク

参加アーティスト　新江千代、有坂蓉子、襟草丁、岡典明、金井聰和、窪田久美子、タナベルン、寺田依里、とし田三津夫、橋村至星、松本力、山本麻世

来場者数	780人
主催	都筑アートプロジェクト
協力	緑区民文化センター みどりアートパーク
実施イベント	10月12日～12月27日：白いメッセージ、11月13日～11月22日：パラダイスから遠く離れて～土地の記憶に刻まれるアート、11月22日：アーティストトーク、11月13日～11月22日：ウィンドウアートプロジェクト

まちに根ざして パンデミックの影響に 迫る展覧会

窪田久美子
「ダンス」

松本力
「1919-1932-1967-1976-2019」

有坂蓉子
「白いメッセージ」

これまで都筑アートプロジェクトでは、地域に埋もれた土地の記憶や風景をテーマに、展覧会やリサーチ、講座やワークショップなど、さまざまな活動を展開してきました。

今回の展示はコロナ禍の状況をこれまでの活動とどのようにつなげるかが課題となりました。議論の結果、これまで土地に刻まれてきた記憶を現在の状況と対比させて新たな表現を模索すると言う方向になりました。結果として、作家に意欲的な試みを促し、新型コロナウイルスによるパンデミックの身近な影響から歴史的な視点まで、多様な観点から迫る展覧会になりました。

コロナ禍への対応として密を避けるため会場は活動拠点である「赤い家」は屋外の壁面展示のみとし、本会場は面積の広い「みどりアートパーク横浜市緑区民文化センター」の地下ギャラリーと1階の屋外のウインドウでも展示を行いました。

ギャラリーでの展示は絵画、ドローイング、映像、写真、インスタレーション作品、調査資料などが配置され、多様な視点が交錯しそれぞれの作品が響き合うような効果を生みます。ウィンドウ作品は、橋村至星の作品の巨大なマスクを展示し、周囲に他の作家の作成した通常サイズのマスクを配したもので、ウィンドウ前を歩く地域の方も楽しめるよう工夫しました。「赤い家」での有坂蓉子の作品も、遊歩道を行き来する地域の方を意識した試みです。ネイティブアメリカンの言葉を表したこの作品はコロナ禍へのメッセージとして、作品を目にした人々にさまざまな問いかけを残し、地域とのつながりの可能性を広げました。

展示最終日にはアーティストトークを行い、作者の作品への思いや制作過程におけるエピソードなどを語りました。

今年はワークショップの開催を断念しましたが、来年はオンラインの導入も見据えつつ、地域との関りの可能性を探っていくことが期待されます。

ティーンズクリエイション2020

ギャラリー展示の様子１

ティーンズクリエイション組織委員会

連絡先

URL	http://www.sakae-art.jp
TEL	045-898-1400（フレンズ☆SAKAE／火・水・金15:00～20:00、土10:00～18:00）
FAX	045-898-1400（フレンズ☆SAKAE）
E-mail	sakae.art2008@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/sakaedetsunagaruart

団体紹介

さかえdeつながるアートが2014年に栄区民文化センター リリスにて行った「テイーンズクリエイション・展」を契機に、2017年11月には若い世代が企画に携わった総合文化フェスティバル「Wakamono Arts Festival」に発展。その後2018年、2019年と継続開催し、パフォーマンス発表や、ギャラリー内でのエレクトーン演奏や朗読劇など、年々新しい試みを実現している。

会期　2020年9月12日～2020年12月20日

会場　【栄区】フレンズ☆SAKAE、栄区民文化センター リリス

参加アーティスト　佐藤良仁、本田淳、竹本真紀、Eyes'、木暮寿子

来場者数	613人
主催	ティーンズクリエイション組織委員会
共催	さかえdeつながるアート、栄区青少年の地域活動拠点「フレンズ☆SAKAE」、公益社団法人かながわデザイン機構、横浜市立桂台中学校「地域交流室オレンジの会」、横浜市栄区民文化センター リリス
後援	栄区役所
協賛	石井造園株式会社、公益社団法人かながわデザイン機構、株式会社ダイショー
協力	横浜市栄区中学校長会、横浜市立本郷特別支援学校、神奈川県立地球市民かながわプラザ「あーすぷらざ」（指定管理者：公益社団法人青年海外協力協会）、くらしまちづくりネットワーク横浜、株式会社タウンニュース社、J：COM
実施イベント	9月12日～12月18日：朗読劇ワークショップ、10月24日～12月12日：Eyes'さん歌詞づくりワークショップ、12月16日～12月20日：Wakamono Arts Fesutival2020、12月19日～12月20日：劇「＃信頼の意味」、12月19日～12月20日：Eyes'さんワークショップ「10'Lights」による歌の発表＆ミニライブ、12月20日：栄区を知ろう！参加型クイズ「栄区王」

地域の若者の創作活動をささえるフェスティバル

Eyes'さんによる歌詞づくりワークショップ「10'Lights」の歌の発表＋ミニライブ

演劇作品「＃信頼の意味」

ギャラリー展示の様子２
photo:MazKen

「ティーンズクリエイション」は、さかえdeつながるアートが母体となり、若者が自分を取り巻く環境や自分自身についてさまざまな気づきを得るために創作活動の場をつくる活動です。今回で５回目となる「ティーンズクリエイション展 Wakamono Arts Festival」の企画や準備には、栄区青少年の地域活動拠点「フレンズ☆SAKAE」に集う若者も積極的に関わっています。

会場となった栄区民文化センターリリス・ギャラリーには書道作品や絵巻物、粘土でつくった野菜、クラフトバッグ、絵画などが展示されました。中学校・高等学校、特別支援学校等の部活動や教科、課外活動の作品に加え、さまざまな経路を経て、中高生世代の作品が並びました。また、栄区に関するクイズを出す○×ゲームや演劇作品の上演、歌の発表も行われました。

○×ゲームでは映像づくりを得意とする若者が主導となりクイズ動画を作成しました。当日は映像を元に会場でクイズ大会を行ったり、観客から出題を募るなど盛り上がりをみせました。

演劇作品「＃信頼の意味」は、脚本・演出・キャストの全てを若者たちで行った作品です。ＳＮＳがテーマとなり、等身大の高校生のリアルを表しました。マスクを着用して舞台に立つ姿は印象的です。

歌の発表会では「Eye's歌詞づくりワークショップ」の参加者が言葉を紡いで創り上げた曲を発表しました。発表１日目は歌はワークショップ講師のみ、参加者は手話のみ行い、２日目は別室で参加者が歌と手話を行い、その様子の生配信が会場のスクリーンに投影されました。対面で歌えない状況のなか、手話ならば歌詞の内容を伝えることができるのではと考え、地域でボランティア活動をする手話の先生から教わりました。

今年はコロナ禍での状況に合わせて開催方法を切り替え、会場と綿密な打ち合わせの上無事に開催できました。展示会の開催中止の多いなか無事に実現できたことはとても大きい成果です。

東横フラワー緑道映像ワークショップ

商店街映像ワークショップ1
photo:斉藤隆

東横フラワー緑道フェスタ実行委員会

連絡先

TEL	090-4244-1958
FAX	045-322-5607
E-mail	papa3110t@gmail.com

団体紹介

東横フラワー緑道を通じて地域の活性化　ヨコハマスリムの推奨　緑道の認知度向上　地域間交流の推進　商店街の会長を中心に地域の代表者が集まった実行委員会。地域の代表者からなる東横フラワー緑道運営管理委員会の下部組織。

会期	2020年11月15日～2021年1月29日
会場	【神奈川区】反町駅前ふれあいサロン、反町地域ケアプラザ、松本会館
参加アーティスト	森康祐
来場者数	14人
主催	東横フラワー緑道フェスタ実行委員会
共催	反町駅前通り商店街
後援	神奈川区役所
協力	ＮＰＯ法人ちいき未来
実施イベント	11月15日～12月6日：子ども映像ワークショップ、12月19日：商店街映像ワークショップ、1月29日：シニア映像ワークショップ

子どもからシニアまで
カメラを通して見つける
わたしのまちの財産

商店街映像ワークショップ2
photo:斉藤隆

シニア映像ワークショップ1
photo:斉藤隆

シニア映像ワークショップ2
photo:斉藤隆

東急東横線の反町駅が地下化され、線路跡地を活用した緑道が整備されて以来、横浜駅北口付近から東白楽駅付近まで続く緑道は、地域の新しいシンボルとして定着しつつあります。それを受けて、地域の商店街主催だった「反町駅前フェスタ」を地域主体のイベントに変更し、年に４回開催しています。毎回40～50店が出店するフリーマーケットの運営主体として現在の形で活動を続けてきました。

とくに緑道の途中にある高島山トンネルではこれまで、長野県飯田市との交流事業の一環として竹灯籠を展示したり、ワインを楽しむトンネルワインフェスタを実施したり、活用に工夫を凝らしてきました。

今年は、地域の子どもたちと映像づくりを通じて、地域の財産である緑道や商店街にクローズアップし、次世代に地域を発見してもらう企画を進めていました。

しかしコロナ禍のため、近隣の学校からの参加が難しく、参加者を集めるのにたいへん苦労しました。松本通り商店街の店舗を取材する「子ども映像ワークショップ」や、地域の防災パトロールの映像を子どもがつくる「商店街映像ワークショップ」など、企画を組みなおしながらの運営でした。

その一つとして、対象を高齢者層に切り替えた「シニア映像ワークショップ」では、各自が感染拡大防止対策を行ないながらという環境ではありましたが、アーティストによるレクチャーのあと、機材の具体的な活用方法を含めた活発な議論が交わされ、映像制作、上映まで行い、新たな企画の可能性を想起させるものでした。

イベントへの参加型から、子ども目線での参画型へと活動展開を広げていこうという矢先のコロナ禍で、先行きを見通すことは容易ではありません。社会状況にあわせながら、今後も町内会、自治会、商店街関係者、反町駅前ふれあいサロン関係者と協力して、地域の活性化を探っていきます。

トーキングキッズハイファイブスクール！

“しゃべろう、うたおう、おどろう、つくろう！”

メンバーによるショートパフォーマンス

TalkingKidsHi5

連絡先

URL	https://talkingkidshifive.tumblr.com
TEL	080-1073-1011
E-mail	ninjaaokid16@yahoo.co.jp
Facebook	https://www.facebook.com/naosuke.aoki
Twitter	https://twitter.com/aokidnaosuke

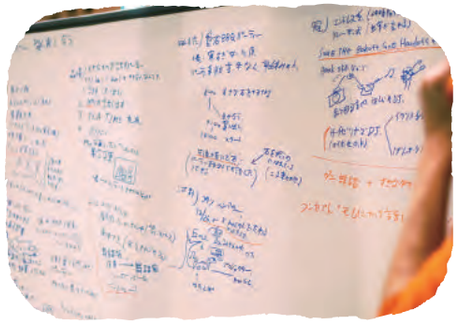
団体紹介

演劇やダンス、美術、音楽など多様なバックグラウンドを持った5人組のパフォーマンスグループ。ワークショップなどの観客参加方法を探ったり、様々な場所での展開を実施していくことで舞台芸術をよりフラットに身近に感じてもらうことを目標とする。

会期	2020年11月27日～2020年11月29日
会場	【中区】横浜赤レンガ倉庫1号館
参加アーティスト	Aokid、よだまりえ、福原冠、額田大志、米澤一平
来場者数	11人
主催	TalkingKidsHi5
協力	横浜赤レンガ倉庫1号館、ヌトミック、プリッシマ
実施イベント	11月27日～29日：PARTYを作ろう

身体をつかって いまこの時間の パーティーをつくろう

2つのパーティーのアイディアを同時にシーン



1日目の参加者やメンバーのアイディアを板書

3日目の参加者によるアイディアのプレゼン中

TalkingKidsHi5はダンサーやミュージシャン、タップダンサーや役者などで構成されたパフォーマンスグループです。「しゃべろう、うたおう、おどろう、つくろう！」をテーマに、踊ることや歌うことの本来的な意味や楽しさを追求し、地域との関りを築くための活動をしています。今回は「PARTYをつくろう」と題して赤レンガ倉庫にて、3日間のワークショップを行いました。

ワークショップはメンバーのパフォーマンスから始まりました。DJが音楽をかけ、ダンサーが踊り、タップダンスや弾き語りも披露されました。その後は参加者も交えてのリクリエーションが行われました。各々が距離をとった上で、踊ったり、エアハイタッチを行ったり、コロナ禍でも相手を感じられる工夫がなされました。その後は参加者がそれぞれ自分の理想のパーティを考え、企画書を書いてみる時間が設けられました。その後の発表では多様なパーティの案が語られ、お互いに聞きながら胸を躍らせました。最後にはみんなのアイデアを一つのパーティにまとめて、実演してみるという小さな発表会がありました。

自分だけで考えていたことを、その場でみんなで考えて実現させていくことで、想像だけで終わらせずに実行することにつながりました。参加者のなかには数日中に企画を練りなおして実行しようという人もいました。TalkingKidsHi5のメンバーが先生として指導するのではなくて、協働者として一緒に考えていく姿勢でワークショップを支えました。

今回はコロナ禍のために、もともと予定していた会場が使用出来なくなったり、十分に広報が行えず参加者が想定より少ないなど予定通りに進まない場面もありましたが、予定よりも大きな会場で開催することが出来たり、3日間同じ内容のワークショップを少数で行ったことで目標や筋道がクリアになったということもありました。今年の経験を次年度に繋げていくことが期待されます。

Picture This 2020:
横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト

参加生徒たち
photo:大薮順子

Picture This Japan

連絡先

URL	https://www.picturethisjapan.com
E-mail	ptj1yokohama@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/picturethisjapan

団体紹介

社会的弱者やマイノリティーと呼ばれる人たちにカメラを持たせ、彼等の世界を内側から写し、メインストリームでは見えにくい世界をビジュアルで発信する。過去、外国人市民、交通事故遺児、犯罪被害者等さまざまなグループと写真ワークショップを行ってきた。

会期　2020年7月4日〜2021年1月17日

会場　【中区】なか区民活動センター、象の鼻テラス【南区】みなみ多文化共生ラウンジ

参加アーティスト　大薮順子、鎌田晋明、Renata Jaroscakova、Patrick MaNeal、Pavlo Olenchyk、Jacek Ratajczak、鈴木花、早福善蔵、Zara Strauss、Sophia Moore、Adam Damareswara、安崎貴博、大谷正利、廣野美賀子、古川俊明、彩咲りん

来場者数	5,323人
主催	Picture This Japan
後援	Photo Yokohama
協力	象の鼻テラス、あーすぷらざ
実施イベント	7月4日〜7月26日、8月1日〜8月30日：横浜インターナショナルユースフォト写真展（前年度の作品展示）、7月5日〜12月13日：写真は語るセミナー、8月30日〜12月6日：横浜インターナショナルユースフォトプロジェクトワークショップ、1月9日〜1月17日：横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト写真展

生まれたルーツに関わらず
誰もが自由に表現する
写真のワークショップ

旧市庁舎敷地に入れてもらい撮影
photo:大薮順子

ワークショップの様子
photo:鎌田晋明

参加者の作品
photo:早福善蔵

2015年に川崎で起こった事件に関わったのが外国ルーツの若者だったことを受け、翌年に外国にルーツある中高生の居場所と表現の場を設けたのが、このプロジェクトの始まりです。

今年度は中高生8人、大人の講座には4人が参加しました。関わるボランティアの大人たちも外国人、外国につながる人に関わってもらい、ワークショップに来ればふだんマイノリティーである子どもたちがマジョリティーとなる環境を作り、堂々と表現できる場を作りました。コロナ禍で行き場を失った参加者は出席率がよく、感染防止対策を取りながらも、カメラを持って外に出ることが、彼にとっての息抜きとなったようで、深い関係づくりもできました。

昨年度の作品の写真展は、7月にみなみ市民活動・多文化共生ラウンジ、8月になか区民活動センターで行いました。昨年同様、写真を通して若者支援をするための人材育成講座「写真は語る」セミナーと中高生たちのワークショップを並走して行いました。フォトジャーナリストのゲストを迎えたり、いつもボランティアとして参加している写真家によるポートレート講座を開催したりと、盛りだくさんのワークショップとなりました。

緊急事態宣言下の1月でも、例年通り象の鼻テラスで写真展を開催しました。あーすぷらざでの展示会は閉館に伴い中止となりました。今回の写真展にはパーソナルな作品が並び、横浜の多文化共生社会の内側を例年よりもっと可視化できたと思います。

今年度は参加を希望する人たちの中には、コロナの影響で参加したくてもできなかった生徒がいると聞いています。オンライン導入も含め対策を考えていきたいと思います。

また関連事業ですが、横浜市国際局の補助金などを通して、4月には5年間の作品を集めた写真集を出版する予定です。これをきっかけに展示物を横浜の外へ貸出し、パネル料等で活動費を捻出し、まだまだ数少ない外国につながる10代の人たちの表現活動と居場所づくりのため、活動を継続していきたいです。

未来に繋ごう、皆んなの!!横浜の!!歴史・文化・芸術!!

～朽ちていく、再生、修復～

「朽ちていく・再生・修復」展示

特定非営利活動法人
美術保存修復センター横浜

連絡先

URL	https://www.npo-acrc.org
TEL	045-231-6006
FAX	045-489-4987
E-mail	yokohama@npo-acrc.org
Facebook	https://www.facebook.com/Arts.Conservation.and.Restoration.Center.Yokohama/

団体紹介

2011年美術品の保存修復活動を広くおこなうため、NPO法人を設立いたしました。この団体は、美術品の保存修復事業並びに、一般の人々および美術品を扱う関係者に対して、保存修復の普及と啓発を活動の柱として、学術、文化、芸術の振興に寄与します。

会期　2020年7月26日～2020年11月3日

会場　【中区】やまのうえ

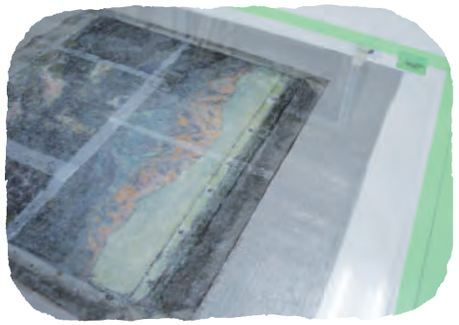
参加アーティスト　大原修一、鈴木ともみ、アトリエ日の出町 生徒達約50名、横浜絵画修復教室生徒、やまのうえを訪れた方々

来場者数	40人
主催	特定非営利活動法人美術保存修復センター横浜
協力	favoris
実施イベント	7月25日：壊れてしまった絵の展示(朽ちていく)、9月19日～9月20日：壊れてしまった絵の展示(再生)、11月3日：壊れてしまった絵の展示(修復)

壊れ、朽ちていく
美術作品のストーリーに
思いをめぐらせる

プリントした絵の上から絵を描こう

壊れてしまった絵の修復(剥離止め)



壊れてしまった絵の修復(裏打ち布を貼る)

特定非営利活動法人美術保存修復センター横浜は、朽ちてしまった絵の修復や保存を行う団体です。絵の修復を通して歴史や文化を伝えるために、さまざまな活動を行っています。

昨年は「未来に繋ごう、皆んなの!!横浜の!!歴史・文化・芸術!!」と題して、参加者を集めて実際に絵の修復を行うワークショップを行いましたが、今年はサブテーマ「～朽ちていく、再生、修復～art　thinking」というテーマに即して「壊れてしまった絵の展示」を3回に分けて行いました。「つないでいくこと」とは何かをいくつかの目線で考える機会として開催しました。

会場はもともと古い写真館だった場所をリノベーションしたカフェ・ギャラリー「やまのうえ」です。展示の内容と会場がうまくリンクしました。1回目は「朽ちていく」をテーマとし、修復前の絵を展示し、2回目の「再生」では修復途中の絵、そして最後は「修復」をテーマに修復が完了した絵を展示しました。参加者は現物をじっくり観察したり、絵が置かれていた場所がどんな場所だったか、歴史的背景を踏まえて考察し、なぜ絵が壊れてしまったのか、ここまでに至るストーリーに思いを巡らせました。また、絵の素材や、壊れた理由に合わせて修復していく過程を観察します。参加者は自然と「art　thinking」をすることができました。

最後の展示ではほかに、子どもたちに壊れてしまった絵の未来を想像してもらう企画として、修復前の絵をプリントし、その上から自由に絵を描いて、自分なりの再生を施してもらった作品を展示しました。当初は対面でのワークショップを企画していましたがコロナ禍の状況を考慮して、絵を募集する形で実施しました。そのことで当初予定していた人数をはるかに超えて50人もの子どもたちがこの企画に参加することが出来ました。縮小の中のイベント開催ではありましたが、来年につなげるための大きな成果だと感じています。

病院と地域とアートでつくるおまつり

オンラインライブを楽しむ患者さんたちの様子

病院と地域の協働による おまつり実行委員会

連絡先

TEL　090-6122-8491
E-mail　n7asami@nifty.com

団体紹介

病院で行われるお祭りを企画、実施することを目的とした実行員会。実行委員は精神保健福祉に関わる様々な立場の人たち（精神障害当事者、支援者、病院スタッフなど）で構成されている。

会期　2020年7月1日～2021年1月19日

会場　【神奈川区】紫雲会横浜病院、せせらぎ【西区】クラウドナインスタジオ
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　西井夕紀子、YUIMA、村野瑞希、三浦穣

来場者数	30人
主催	病院と地域の協働によるおまつり実行委員会
共催	紫雲会横浜病院
後援	横浜ピアスタッフ協会
実施イベント	8月14日～10月13日：ラジオ作りワークショップ、1月19日(火)：たのしいふゆのライブ2021

精神障害当事者と オンラインでつなぎ 病院と地域が交わる

たのしいふゆのライブ2021の様子1

たのしいふゆのライブ2021の様子2

オンラインで病院と施設とスタジオをつないだ様子

病院と地域の協働によるおまつり実行委員会は、病院で行われるお祭りを企画、実施することを目的とした実行委員会で、精神障害当事者、支援者、病院スタッフなど、精神保健福祉に関わるさまざまな立場の人たちで構成されています。

今年も当初は院内で「秋まつり」を実施する予定でした。しかしコロナ禍により開催が困難となったので事業の目標を「入院患者さんとの交流を途切れさせず、継続させること」にしました。患者さんたちは、コロナを理由に外出許可が降りづらくなり、家族との面会も出来なくなり、患者さん同士の交流の機会も減ったりと、不自由な生活を余儀なくされました。いかに外にいる人と交流を持ち、外の空気を病院の中に持ち込むかが課題でした。そこで、夏ごろはラジオ番組を作りその中での交流を2回試みました。録音したものを病院に送ったり、それに対してリアクションをもらうような形をとりました。番組では病院の患者さんが書いた手紙を歌詞に歌をつけ、ほかの福祉施設の利用者が歌ったり、詩の朗読が行われたり、恋愛を語ったりと楽しいものになりましたが、交流するという目的からは少し離れ、継続に至りませんでした。

その後、企画した院内でのミニライブが実現目前で中止になりましたが、1月にオンラインでのライブを行うことが出来ました。スタジオと病院をつなぎ、患者さんが作った歌詞にメロディーをつけたオリジナル曲や、患者さんからのリクエスト曲などをを演奏しました。オンラインツールでコミュニケーションをとりながらライブは進みました。ライブ終了後、患者さんのなかには、自分たちのことを忘れないでいてくれて嬉しく思い涙を流した方や、ライブ直後から新たな詩を書き始めた方、ずっとやめていた手芸の作業を再開された患者さんもいたそうです。

精神病院で外部の人がイベントを行うことはとても貴重な事例です。今後も活動を継続し、可能性を広げていくことが期待されます。

本牧こどもディスコseason6

自宅でレッスン1

本牧こどもディスコ実行委員会

連絡先

TEL	090-3542-4422
E-mail	artdisco2@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/kodomodisco/
Instagram	https://www.instagram.com/honmoku_kodomodisco/

団体紹介

「こどもディスコ」は地域の大人たちでで構成された本牧アンバサダーと、ダンサーを中心として構成された、美術、ミュージシャン、DJ、VJ、デザイナー、映像、カメラマンが集まったプロのクリエイティブ集団によって構成されています。

会期　2020年11月2日〜2021年1月31日

会場　【中区】本牧地区の店舗など
※主にオンラインで開催

参加アーティスト　内木里美

来場者数	7人
主催	本牧こどもディスコ実行委員会
協力	リボンファンストリート、大島中学校コミュニティハウス、本牧中学校コミュニティハウス、HOCS（本牧コミュニティ・ステーション）、Yokohama FDS、ツインソウル、有限会社ナイキスタンダード、株式会社エスタディオホールディングス、有限会社小林薬局、本牧ベース、横浜ロイヤルホテル、美濃屋あられ、本牧葬儀社本牧ホール、ようせいのいたずら、本牧玉家、Honmoku Cake-ya yoko、炭火焼鳥おきまる、本牧コーヒー、森野帆布株式会社
実施イベント	11月2日：PV撮影巡り、1月9日〜1月30日：オンラインダンスレッスン、1月31日：オンライン発表会収録

本牧で子どもたちが刻む新しい街の記憶と70年代のダンスステップ

最後のポーズ

紙吹雪

イベント後のポーズ

70年代後半から一世を風靡した本牧生まれのダンスステップ・フリーチャチャを伝えていくことを目的に2015年から開始したこのプロジェクト。今年はオンラインで展開を行いました。

こどもディスコのプロモーションビデオとして、本牧のまちを舞台にした映像作品を製作するため、これまで資金的協力をいただいてきた本牧地区の商店など16ヶ所に出向きました。なかなか発表会に足を運ぶチャンスがなかった方たちも、撮影には喜んで協力してくれ、中には一緒にステップを踏んでくれる店主もいました。大人たちから順に引き継いでいる文化だということが映像記録としても残り、本牧地域の魅力発信ができました。あわせて本牧に住む子どもたちにもアピールできたと思います。こどもディスコのオリジナル曲も作ったので、今後の活動とともにテーマソングとして育てていきたいです。

この映像作品に登場し踊ってくれた子どもたちは5年前から活動に参加しており、フリーチャチャの定番ステップを教わらなくても踊りこなせるなど、これまでの積み重ねが形になってあらわれています。

今年度のオンラインダンスレッスンに加わったのは、リピーターを中心に7人の参加者。学童の先生に声をかけられ、預かり時間中に参加した子もいました。いざ参加すると、子どもたちはオンラインの環境に慣れるのがとても早く、本当にディスコ会場にいるかのように、達成感を感じながら踊っていたように感じます。それぞれの自宅からネットでつないだ発表会も大成功でした。

フリーチャチャの今後を考えた場合、古いイメージをリブランディングする必要があるでしょう。ステップが揃うかっこよさ、誰でも踊れる気軽さ、即興で組み立てていく面白さを若者のカルチャーに届けるためにはファッション、ヘアメイク、写真などとともに、積極的に仕掛ける知恵を出したいところです。今までのディスコのイメージを壊すような取り組みが求められていると感じます。

「街のはなし」

写真選考朗読会の様子１

「街のはなし」実行委員会

連絡先

URL	http://www.machinohanashi.com
TEL	090-7445-3040
FAX	045-901-1014
E-mail	kyocotaniyama@gmail.com, contact@machinohanashi.com
Facebook	https://www.facebook.com/machinohanashi
Twitter	https://twitter.com/machinohanashi

団体紹介

街の「昔」を語り継ぎ、「シビック・プライド」を育み、街の「未来像」を多世代みんなで描きリードしていく場作り。住民が誇りを持って積極的に街に関わる基盤を築く。まちづくりのスピリットを繋いでいくために地域住民が中心となって活動する団体。

会期　2020年7月15日～2021年1月31日

会場　【青葉区】美しが丘中部自治会館、スタジオシフォン
※主にオンラインで開催

参加アーティスト　谷山恭子、小池美咲、藤木和人

来場者数	103人
主催	「街のはなし」実行委員会
協力	まちのコイン、100段階段プロジェクト
実施イベント	7月15日～7月22日：ONLINE インタビュー、11月22日：写真選考＋朗読会、1月31日：オンライン発刊記念会

そこに住むひとの声を
緯度経度で刻んでいく
美しが丘の記憶

限定公開インタビューの様子１

「街のはなし」7号

写真選考朗読会の様子２

1960年代から造成が続くたまプラーザ・美しが丘の街を舞台に、幼稚園児から80代までの、多世代から話を収集する、冊子形式のアートプロジェクトを行いました。

今年は、オンライン公開インタビューとして11人のお話をオンライン配信で伺いました。インタビューしたのは、この地域の焼肉屋店長、歯科医、若手フォトグラファーの登山家から中学生、園児まで総勢11人。個人的なお話も出ることを考え観客を限定する形になりましたが、街への想いにあふれた話を聞けました。数名の方から「自然」に関する話題があがったことは、コロナ禍を含めた現状へのリアクションでもあったのではないかと感じ、大切に受け止めて伝えたいと思いました。

11月には、それぞれの方の話を書き起こしたエッセイを参加者が読む朗読会と、冊子に掲載する写真の選考会をオンラインで開催しました。「朗読を聴く」という行為は、目で文字を追いつつ理解する「読む」という行為とはまた違った感性を刺激される経験です。画面越しでありながら、リアルなふれあいが感じられました。途中配信トラブルもありましたが、公開映像として記録が残っているため、遠方から参加する人や、事後に視聴したい人にとってアクセスしやすい形になりました。

映像と音の記録アーティストと地元の若手写真家をコラボレーターとして迎え、完成した冊子「街のはなし」7号は充実したものとなりました。発刊記念会ではゲストとともに、普段伝え切れないプロジェクトのコンセプトや活動の詳細をあらためて伝え、記録することができ、応援者を増やすことができました。

2014年から続けてきた「街のはなし」は、住民の声で綴る「町史」であり、次世代が担う街の未来像のリソースであり、住民が誇りを持って積極的に街に関わる基盤を築くための活動です。今後も関わってくれるメンバーを増やし、オンライン展開にも積極的に取り組んでいきたいと思っています。

ロケ地で映画を鑑賞しよう！！

聖地巡礼上映会『1999年の夏休み』in大倉山記念館（港北区）＆『風のある道』in神奈川県立音楽堂（西区）

「風のある道」上映会の様子１

横浜キネマ倶楽部

連絡先

URL	https://ykc.jimdofree.com/
TEL	080-8118-8502
E-mail	yokohama_kinemaclub@yahoo.co.jp
Twitter	https://twitter.com/YokohamaKinema

団体紹介

横浜キネマ倶楽部は、横浜で永年親しまれてきた映画館の相次ぐ閉館を惜しむ映画ファンが集まり、2005年5月発足し、「横浜に映画ファンの思いが反映される映画館をつくる」ことを目標に掲げて上映活動を続けています。

会期　2020年8月10日～2020年9月22日

会場　【港北区】横浜市大倉山記念館【西区】神奈川県立音楽堂

参加アーティスト　金子修介、高崎俊夫

来場者数	316人
主催	横浜キネマ倶楽部
後援	横浜市教育委員会
実施イベント	8月10日：映画『1999年の夏休み』上映会、9月13日：大倉山記念館のロケ地巡り、9月22日：映画『風のある道』上映会、9月22日：神奈川県立音楽堂マップの展示

物語の世界に飛び込んで ロケ地で鑑賞する映画

「風のある道」上映会の様子２

「1999年の夏休み」上映会の様子１

「1999年の夏休み」上映会の様子２

毎年４～５本の良質な佳作の映画作品の上映活動を続けている私たちはこの数年、中区・寿地区や、鶴見区・小野地区など映画を撮影したエリアに近いホールでの上映会も行ってきました。今回アートサイト参加プロジェクトとなった２つの上映会は、上映する会場が映画の中に登場するという本当の意味でのロケ地上映会となったことが特徴でした。映画を鑑賞した後に、映っていた場所に直に触れたり、見たりすることができます。

大倉山記念館のホールで上映した『1999年の夏休み』は熱心なファンも多く、公開から30年以上経った現在もこの映画のファンサイトが４つほどあり活動しています。映画の中で教室として使用されているのは「第４集会室」、音楽室は「第５集会室」です。本作品の監督である金子修介氏が上映会の告知をしてくれたため、早い時点でチケットは完売しました。同日に映画のファンが集会室を予約して、映画に関する展示会を開催しており好評を得ました。

神奈川県立音楽堂で上映した『風のある道』は61年前に撮影された映画でありながら、物語のクライマックスで登場する音楽堂のロビーが今とほとんど変わっていないことに、参加者は一様に驚いていました。バンドホテルや横浜日劇など、映画の中でしか見られない建造物も多くあります。歴史のある建物の保存の重要性についても考える機会になりました。作品に登場する横浜市在住の女優・芦川いづみさんにはファンがおり、多くの反響を受けました。

コロナ禍のため、大幅な席数制限を行わざるを得なかったり、公共施設でのチラシの配架が断られたりと今回は運営上の苦労が続きました。映画を楽しみにしていた方の中にも、感染リスクを考え外出を控える人もいました。やはり、コロナ禍の今後の推移が最大の課題です。そういった中でも、横浜の歴史や文化を立体的に感じることのできる聖地巡礼上映会を、今後も計画し続けていきたいと考えています。

横浜下町パラダイスまつり2020
＋よこはま若葉町多文化映画祭2020

近隣の多文化なこどもたちとただひたすら遊ぶ会

横浜下町パラダイスまつり実行委員会

連絡先

URL	http://downtownart.hama1.jp/
E-mail	yokohamawakaba@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/ParadiseFes/
Twitter	https://twitter.com/paradisefes

団体紹介

横浜下町パラダイスまつりの参加アーティストたちによって設立された実行委員会です。横浜開港以来の歴史が集積されてきたこの地域の独自性を理解し、アーティストたち自身が自主的に活動を継続しています。

会期　2020年7月23日～2021年1月31日

会場　【中区】シネマ・ジャック＆ベティ、横浜パラダイス会館とその周辺、グリル アンド カフェ モーリーズ、ネパール料理店「ナマステ・ポカラ」
※そのほか、ミリム劇場（韓国仁川）、オンラインで開催

参加アーティスト　来島友幸、中村剛彦、青山るり子、青山ふじ子、青山珠子、テン・ヴァン、今井紀彰、ブラジル炭火焼肉ガウシャ、スズキクリ、蔭山ヅル、岸井大輔、米野みちよ、真鍋祐子、チェ・ヒョンジュン、グルング・ラム・ラジャ、グルング・アンジュ、藤川史人、太田昌国、柴原三貴子、小川忠、クレシ愛民、梶原俊幸、箒有寛、大川景子、作田知樹、大澤寅雄、ビッグイシュー販売員イデちゃん、Art Lab Ova

来場者数	4,499人
主催	横浜下町パラダイスまつり実行委員会
共催	Art Lab Ova、横浜シネマ・ジャック＆ベティ、よこはま若葉町多文化映画祭実行委員会
協力	若葉町町内会
実施イベント	7月23日～1月31日：近隣の多文化なこどもたちとただひたすら遊ぶ会、8月30日～9月13日：アーティスト来島友幸「実験！日光写真」、11月13日～11月16日：ハッピーティハール2077～ネパールのお祭りを祝う会、11月21日：モン族テン・ヴァン「モン族のお正月＠横浜」、11月28日～12月6日：ホームレスを支援する雑誌「BIG ISSUE」販売と手品、11月28日：ケルト文化研究者 鶴岡真弓さん映像トーク、11月28日～11月29日：おめんづくりワークショップ、11月28日：朝鮮文化研究家　真鍋祐子さんトーク・交流会、11月28日：藤川史人監督＋編集者・民族問題研究家　太田昌国さんによるトークショー　ブラジル炭火焼肉食事会、11月29日～12月2日：「ムスリムの女たちのインド」著者 柴原三貴子（アリ三貴子） さんトーク、11月29日：「ムスリムの女たちのインド」著者 柴原三貴子（アリ三貴子）さん＋元ジャカルタ日本文化センター所長　小川忠さん交流会、11月29日：フィリピン音楽研究者　米野みちよさんトーク・ブラジル炭火焼肉食事会、11月30日～12月3日：民族文化映像研究所　箒有寛さんトーク、11月30日：藤川史人監督トーク、12月1日：シネマジャック＆ベティ・サロン～支配人とお茶会、12月2日：ヤングムスリム活動家　クレシ愛民さんトーク　交流会、12月2日：韓国仁川ミリム劇場観客によるトーク　交流会、12月2日：「ムスリムの女たちのインド」著者　柴原三貴子（アリ三貴子）さんカレー食事会、12月3日：民族文化映像研究所　箒有寛さん交流会、12月4日：藤川史人監督×大川景子監督トークショー　ブラジル炭火焼肉食事会、11月28日～12月6日：よこはま若葉町多文化映画祭2020、11月28日～12月6日：写真家今井紀彰＋Art Lab Ova「となりにすむ人」、1月30日～1月31日：韓日教科書プロジェクト、1月30日：モン族テン・ヴァン＋ダンサー青山るり子「モンモン散歩」その2（再演）、1月30日：劇作家岸井大輔「横浜下町パラダイスまつりについて覚えていることを教えてください」、1月31日：路上と公園～わたしたちの日常

多文化な映画と
さまざまな出会い
まぜこぜになって支えあう

ハッピーティハール2077～ネパールのお祭りを祝う会
photo：福田依子

となりにすむ人～ネパールの家族
photo：今井紀彰

モン族テン・ヴァン＋ダンサー青山るり子「モンモン散歩」その2（再演）
photo：福田依子

中区・若葉町の横浜パラダイス会館を拠点に、今年も多彩なプログラムを行いました。

身近な「世界」について考えるよこはま若葉町多文化映画祭では、近隣在住の人々にゆかりのある国や多文化共生を描いた映画を約11本とりあげました。特に今年は日本での上映機会が少ないインドネシアとフィリピンの映画を上映し、終了後のトークも含めて立体的に両国の国民性や宗教観、世界における立ち位置を考察できました。また韓国とのオンライン交流会の会話の中から、日韓の歴史教科書を比較する企画が立ち上がり、一部展示をすることもできました。

多文化なまちの歴史や現状を考察するプロジェクトでは、近隣のネパール料理店と共にネパールの祭「ティハール」を企画しました。ネパール料理店の家族には「母国を離れて以来、多忙のために国の祭を行う機会がなかった」と喜ばれ、ネパールの祭を初体験した日本人にも好評でした。今後はほかの国の人々のニーズも聞き、さまざまな祭も企画していきたいです。

近隣在住の海外ルーツの子どもたちと共に作るプロジェクトでは、家庭と学校以外の体験の少ない子たちのために学習支援やワークショップを開催しました。今年は特に縁日などがなかったので、花火大会を企画し公園でみんなで食事をする機会を作ったところ、知らぬ間に子どもの親や祖父母なども集まってきていました。来年は予め家族にも参加してもらうことを想定して企画を考えたいです。そのほか、12年目を迎えた活動を総括するプロジェクトも行いました。

今年は感染症の影響で、先が見えずに苦労をしましたが、人が移動し、集まる企画の意味を問い直し、あらためて「となりに住む人々とどう生きるか？」を考える機会になりました。今後どのようなプロセスを経れば近隣住民たちと「自主的な」企画を開催することができるかが重要な課題になってくると思います。

全国ミニシアター地域交流上映会
横浜×尾道

会場シネマ・ジャック＆ベティ入口＆感染症対策

横浜シネマネットワーク実行委員会

連絡先

E-mail　kajiwara@eduit.co.jp

団体紹介

横浜市内で活動する映画館、映画祭、上映イベントの主催者のネットワークです。さまざまなイベントや企画をとおして映画の楽しさ、豊かさを発信しています。

会期　2020年1月23日～2021年1月23日

会場　【中区】シネマ・ジャック＆ベティ

参加アーティスト　河本清順、尾美としのり、北見秋満、梶原俊幸

来場者数	24人
主催	横浜シネマネットワーク実行委員会
共催	文化庁次代の文化を創造する新進芸術家育成事業、一般社団法人コミュニティシネマセンター
協力	シネマ尾道、神奈川県興行生活衛生同業組合
実施イベント	1月23日：ミニシアター地域交流上映会　横浜×尾道

上演とトークで
映画のまち
横浜と尾道が通じ合う

オンライン　お別れの挨拶

オンライン　お客さんからの質疑応答

ビデオレター　尾美としのりさん

私たちは、全国コミュニティシネマ会議2017イン横浜を契機に立ち上がった、映画に関わる人たちの情報交換と交流のためのネットワーク体です。今回は、2020年のヨコハマ映画祭第1位に輝いた大林宣彦監督の映画作品「海辺の映画館　キネマの玉手箱」と連動し、映画のまちとして知られる広島・尾道との地域交流を行う予定でした。しかしコロナ禍のため、客席数の制限をはじめとして、映画館の状況は経営的にたいへん厳しい状況が続きました。伊勢佐木町エリアにあるシネマ・ジャック＆ベティや横浜シネマリンでは、応援グッズ販売やクラウドファンディング等を実施して、横浜から映画の灯を絶やさない工夫に連日追われました。

今回の企画では、緊急事態宣言下で県境の移動を控えたため、横浜と尾道それぞれの地域のミニシアターに、実際に足を運ぶことはできませんでした。その代わり、企画を縮小し映画上映のあと、シネマ尾道の支配人・河本清順さんと、ジャック＆ベティの梶原俊幸さんによるトークを行いました。

シネマ尾道の活動紹介の中からは、地域の特性を活かし、地域が舞台となった映画を大切にすることで、地域に根ざした映画館の運営の道筋が明らかになっていくことが分かりました。

大林作品の常連俳優である尾美としのりさんからのビデオメッセージのほか、ヨコハマ映画祭実行委員長の北見秋満さんも加わってのクロストークや、参加したお客さんからの質疑応答も行いました。

事業終了後の3月にはシネマ尾道で、横浜を舞台にした私立探偵・濱マイクシリーズの映画作品「我が人生最悪の時」の上映が行われます。オンライントークに横浜シネマネットワーク実行委員会のメンバーも参加するなど、交流を続けていく予定です。コロナ禍の収束後には、さらに地域、劇場を増やしての開催が期待されていると感じています。先の計画が立てづらく、地域間の移動を含めた事業が可能かどうかを引き続き検討していきます。

若葉町ウォーフ「まちなかギャラリー2020」

「マスクの逆襲：マスクの哀愁」の様子

会期　2020年7月6日〜2020年12月22日

会場　【中区】若葉町ウォーフ

参加アーティスト　竹屋啓子、五十嵐あさか、劇団ドクトペッパズ、樊天谷、渡邉麗、清水寛二

来場者数	694人
主催	一般社団法人横浜若葉町計画
協力	コーヒー・タロー、誠心社、公益社団法人鐃仙会
実施イベント	7月6日〜7月23日「壁展」、7月23日：「とまどいの壁」、11月24日〜12月1日：マスクの逆襲、11月29日：マスクの哀愁、12月14日：光の譜、12月15日〜12月22日：祈りの軌跡

一般社団法人横浜若葉町計画

連絡先

URL	https://wharf.site
TEL	045-315-6025
FAX	045-315-6027
E-mail	info@wharf.site
Facebook	https://www.facebook.com/wakabachoWHARF/
Twitter	https://twitter.com/WAKABACHO_WHARF
Instagram	https://www.instagram.com/wakabacho_wharf/

団体紹介

若葉町ウォーフは劇作家、演出家である佐藤信の呼びかけで2017年にオープンしました。1階に劇場（ホワイトキューブ）、2階にスタジオ、3階には宿泊施設を備えた民間のアートセンター。アジア各国のアーティストとの協働プログラムに特に注力しています。

劇場空間を「町の広場」に地域へのメッセージ

「壁展」の様子1

「壁展」の様子2

「壁展：とまどいの壁」

一般社団法人横浜若葉町計画は劇場・スタジオ・宿を兼ね備えた民間アートセンター若葉町ウォーフの運営やイベントの企画を行い、地域から海外まで多様なコミュニティや人々が交わる波止場（ウォーフ）となるべく活動をしています。「まちなかギャラリー」は昨年度と今年度で合わせて6回行い、施設内の劇場をギャラリーとして入場無料で開放し多様なアートに触れる機会を地域のみなさまに提供させて頂いています。

今年度はコロナ感染症の拡大により、若葉町ウォーフで予定していた企画は規模や方法を大きく変更することを余儀なくされました。また、2020年4月〜5月の緊急事態宣言の折には施設営業を休止することとなりました。しかし、若葉町ウォーフの活動を止めてはならないと感じ、まちなかギャラリーの期間以外でも可能な限り施設内の劇場を入場無料で誰でも利用できる「町の空き地」として活用することにしました。その活動の中で近隣のアーティストの方々に声を掛けて劇場の壁に絵を描いてもらうプロジェクトを始めました。壁画は7月にまちなかギャラリー2020「壁展」として展示し、展示に合わせる形でダンスとチェロによるパフォーマンス作品「とまどいの壁」を緊急事態宣言後では初めての劇場公演として行いました。また11月に行った「マスクの逆襲」では500個のマスク（お面）の土台を近隣のみなさまに配布し、それぞれのオリジナルマスクを作成して頂き展示しました。この展示企画を通して地域のみなさまとの新たな関係ややりとりが生まれ、地域の中にあるアートセンターとしての役割を改めて感じることが出来ました。12月に行った書道展「祈りの軌跡」では書家・渡邉麗が劇場の壁画に呼応し、時代へのメッセージを表現した書を展示しました。他の展示と少し趣が異なり、来場者が時間を掛けて書と向き合っている様子が印象的な展示となりました。関連イベントでは能楽とチェロのパフォーマンス「光の譜」を行いました。

今後はこの活動を経済的に持続可能にすること、継続的な活動に繋がる環境づくりを行うことが課題だと感じています。

LITTLE ARTISTS LEAGUE YOKOHAMA

～アートを通してグローバル思考を育むプログラム～

「カラ・ウォーカーのシルエットアート」ワークショップの様子

LITTLE ARTISTS LEAGUE

連絡先

URL	https://www.littleartiststleague.org/
E-mail	littleartiststleague@gmail.com
Facebook	https://www.facebook.com/littleartiststleague/
Twitter	https://twitter.com/lal_japan

団体紹介

LITTLE ARTISTS LEAGUEは2016年にバイリンガルアーティスト3人が立ち上げ、横浜を拠点に次世代を担う子どもたちがアートを通じてより多様な表現力とグローバル思考を育むことをミッションとしたアート団体です。

会期　2020年7月18日～2021年1月30日

会場　【中区】臨港パーク
※そのほか、オンラインで開催

参加アーティスト　MIOKO MOCHIZUKI、LUMICO HARMONY、AIMEE ISOBE、TATHINA、小山奈那子

来場者数	199人
主催	LITTLE ARTISTS LEAGUE
共催	ART OF CHANGE 21
協力	NPO 法人ザ・グローバル・ファミリーズ
実施イベント	7月18日～12月31日：MASKBOOK 新コロナ時代をマスクアートで表現しよう、9月27日：フォルムの擬人化、ファウンドオブジェクトアート、10月25日：LAL ハロウィン MASKBOOK、11月1日～1月31日：オータムアトリエ 世界の名画をコラージュしよう、11月8日：世界の名画 ポートレートコラージュ、12月5日：カラ・ウォカーのシルエットアート、1月30日：墨絵アート

外国をルーツに持つ子どもたちに多様なアート表現の場をひらく

「フォルムの擬人化ーファウンドオブジェクトアート」ワークショップ

MASKBOOK参加者の作品「森林火災」

「世界の名画ポートレートコラージュ」アートキット

2020年はコロナ禍の中でこれまでの活動を新しい形に変換することに試行錯誤を重ねた一年となりました。継続的に行ってきたマンスリーワークショップは、オンラインに切り替え実施。またＳＮＳ上では、親の文化とは異なる環境で育つ子どもたちとそのファミリーからなるコミュニティーとの対話を積極的に行いました。

コロナの情報をはじめ社会動向が汲み取りにくい在留外国人の親は不安やストレスを感じており、子どもも大人も感じていることを表現に転換することがアートに求められていることだと考え、表現の場を提供し続けることに活動の意義を見出しました。

学校が再開し、感染者数が減少の傾向にあった夏頃からは、オフラインのワークショップを要望する声が寄せられ、9月からはマンスリーワークショップを再開しました。ソーシャルディスタンスを保ちながらのワークショップでは参加者が久々に顔をあわせることができ、コミュニティアートの社会的役割をあらためて実感する機会にもなりました。

例年実施していた公開イベントはオンラインギャラリーとして開催しました。8月に公開したオンライン企画「MASKBOOK」では、フランスのNPO団体「ART OF CHANGE 21」とパートナーシップを組み、環境問題やコロナ問題をマスクで表現するプロジェクトを展開しました。メディアでも取り上げられ、多くの人が参加。ポートレート写真を特設サイトギャラリーやＳＮＳで発表しました。

秋には、自宅でワークショップに取り組めるアートキット「世界の名画をコラージュしよう」を開発、販売。関連のワークショップも実施し、多くの参加者の作品をオンラインギャラリーで展示しました。

活動を継続するためデジタル面の強化が課題でしたが、2020年度は新しいチャレンジをもたらしてくれた一年となりました。団体の原点のミッションを再確認し、アートを通して創造性と多様性に取り組む地道なコミュニティー活動を継続していきます。

今年度のヨコハマアートサイトラウンジは、コロナ禍への対応として
事務局がインタビューを行い、この実施レポートとウェブサイトで発信をしています。

Vol.26

テーマ

場から考える演劇

佐藤 信
さとう・まこと／一般社団法人横浜若葉町計画 代表理事

劇作家・演出家。若葉町ウォーフ芸術監督。座・高円寺（杉並区立杉並芸術会館）芸術監督。若葉町ウォーフは劇場、スタジオ、宿を兼ね備えた民間アートセンター。ヨコハマアートサイト2020採択事業「まちなかギャラリー」では、ふだんは閉じられた劇場という場所が誰でも気軽に立ち寄れる空間になることを目指している。

空き地として場をひらく

―― コロナ禍においてのご自身の活動についてお聞かせください

若葉町ウォーフの活動を止めてはいけないと感じ、催し物のための場としてではなく空き地として開放しようと考えました。コロナ禍になってから、週に一度、近隣の人たちと共に井戸端会議のようになんでも話せる定例ミーティングを行っていたのですが、その中で一つアイデアが浮かびました。それは劇場の真っ白な壁にアーティストに壁画を描いてもらってはどうかということです。呼びかけると13人ものアーティストが集まってくれました。コロナ禍で絵を描くことから遠ざかっていたという画家も、ここでは熱量をもって描くことができたといいます。やはり人との関わりが大切なのだと実感しました。これを7月に、まちなかギャラリー2020「壁展」として地域に開きました。さらに展示にあわせて「とまどいの壁」と題したチェロとダンスの即興演奏を行いました。壁画はコロナの記憶を宿していますが、そんな壁画の前でパフォーマンスを行うとどうなるのかという試みでした。11月には、「マスクの逆襲」展を開催しました。その時は500個もの白いお面をつくり、装飾を施して返してもらうよう近隣に配りました。すると帰ってきたお面は450個もあり、しかも一つひとつが素晴らしい出来で、驚きました。展示には子どもたちもよく立ち寄ってくれました。12月に行われた書道の展示では、書家の方がこの壁画に呼応して、時代へのメッセージを書きたいと申し出てくれました。さらに、そのメッセージを能楽師に読んでもらうパフォーマンスも上演しました。こんなふうに行っていたら、ここに演劇の要素がすべてあるんじゃないかと思えたんです。

―― 今後の演劇の在り方についてどのように考えておられますか。

かつて300人程度以上が普通だった演劇ですが、その規模を少なくしたことで始まったのが小劇場でした。定着には時間がかかりましたが、今は一般化しています。私はその過程の中で運動を行ってきたので、もう一度その原点に立ち、コロナ禍の状況が続くとしても演劇を続けるために、上演形態を20人くらいでも継続できる方法を考えていきたいと思っています。

マスクの逆襲

失敗を失敗といえる社会

―― この時代の「公共性」について何を思われますか。

表現活動というのは、言語にならない部分を他者に伝えたいという手段だと思うんです。たとえば小説が論文と違うところは、伝えようとしていることが、実は言語にならない部分だということなんですね。人間というのは、つねに言語にならない部分を抱えていて、その部分がお互いに重なりあうところに「公共性」があると思います。だから、そのときに使われる言葉はわかりやすい言葉ではなく、工夫が必要になってくるんです。けれども、現代ではそこを混合して考えてしまう人が多くなっていると感じます。「公共性」＝わかりやすさだと思ってしまうんですね。たとえば助成金を申請するような場面では、わかりやすい言葉が必要だけれど、先に言った人間の言語にならない部分を表現するためには、異なった感性で工夫しなくてはいけません。だからその工夫は、聞く人によっては全然わからなかったり、話の脈絡がぶれたりする。そうしながら伝わっていくものなんです。だから、ここでもう一つ「公共性」のために必要なのは、失敗を失敗と言えることなんです。わかりやすく厳密に伝える言葉では失敗は許されませんが、本来の意味での「公共性」を求めるときには失敗が必要で、そのことを受け入れる社会があるべきだと思います。

小さなコミュニティの声を聞くことから

―― 横浜の地域文化の作り手へメッセージをお願いします

コロナ禍になり、私も芸術の作り手の役割とは何なのか改めて考えさせられました。もちろん役割はあると思います。ただ、それを根本的なところから考え直すことが大事だと思います。みなさんには自分たちの表現活動を、市場をベースに考えることをやめ、社会的立場は何なのかを考える機会にしてほしいです。市場から離れるためには、まず徒歩圏内に自分たちの表現の場をつくることがとても重要だと私は考えています。自分の居場所をしっかりと決め、その範囲でどういう役割を果たせるか。次に移動とネットワークによって営みを広げていく。そのことで持続的な活動を行えるのではないかと思います。

もう一つ大切にしたいのは、観客のことを顧客ではなく、協働者として捉えることです。これは市場と離れることにもつながります。自分がやりたいことを漠然と探すのではなく、小さなコミュニティの声を聞き、何が求められているのかを見つける。実はこうすることで社会全体が求めることにつながっていくんです。

祈りの軌跡

佐藤信さんの事例事業は52ページで紹介しております。

Vol.26

テーマ

半径2キロから見える世界

藤井 本子
ふじい・もとこ／「街のはなし」実行委員会

美しが丘中部自治会アセス委員・街のはなし実行委員・100段階段PJ代表。ヨコハマアートサイト2020採択事業「街のはなし」では、アーティストの谷山恭子と共に、公開形式で開催するインタビューで答えにあがった場所の緯度経度の座標を調べ、その場所にまつわる個人的な思い出を冊子として発行する活動を行っている。

自治会活動の先にあったアート

――「街のはなし」実行委員会に関わっている藤井さんの専門分野と来歴を教えてください。

私は専業主婦で、たいした特技もなく、ぼーっと生きてます(笑)。1979年にたまプラーザに越してきてから、すぐ自治会に関わることになりました。

私が属している美しが丘の中部自治会は、日本で初めて住民が建築協定を作り、1972年から2003年まで30年以上継続しました。建築協定って普通はデベロッパーが固まった地区にかけるのですが、ここでは住民が自分たちの環境を守るため、自分たちの約束ごととして作られました。当時の私はまちづくりは行政がやることだと思っていたので、まちは住んでる人が作るんだということがショックでした。

みんなの合意を取るって、大変。でも取れるまでやるんです。約1000世帯のうち20人くらいが委員会で話し合うのですが、建築や土木関係者や、法律に詳しい方がいる。私は何でそこに参加しているかっていうと、住んでいる住民の意見を言うため。だって昼間ずっと家にいる人の意見って、すごく大事でしょう。

2003年から地区計画制度として法律の網がかけられるようになり、私も関わり、アセス委員長を５年ほど務めました。行政とのやりとりでもプロフェッショナルだと「自分は理解できない」ってなかなか言えない。私だったら「すいません。それってどういう意味ですか」って言っても不思議じゃない(笑)。今までのように人とのつながりだけに頼る方向ではなくなった時点で、あらためて私は何をしていこうか考えました。特別な能力はないので、まちづくりのスピリットを若い人たちに残していくことしかできない。だから外から来た若いアーティストと街の人たちをつなぐとか、街を守り育ててきた先輩と、これからこのまちで生きていく若い人たちをつなぐとか、間に立つことを私はしていこう、まちに対する恩返しをしようと考えたんです。美しが丘に育ててもらったから。

インタビューの様子

――藤井さんとアートとの関わりは、いつごろから始まったのですか。

2000年のことです。レストランにご飯を食べに行ったら、世田谷美術館の社会人講座の募集があって参加しました。めっちゃ面白くて。写真の撮り方を教える講座のことはよく憶えています。写真を撮るときに気をつけることは、まず四隅を確認すること。ヨシ！ってなったら一歩前に出ること、って教わったんです。余計なものが入っていない構図を作り被写体に寄る。カメラに触ったのは生まれて初めてだったんですが、あれから写真を続けています。人を撮るのが好きなんですよ。

それまで自分はアートといったらファインアートだと思っていたんですね。でもそうじゃなく、生活がアートなんだと思うようになりました。いまの自分っていうのは、自分の作品だって。これまでの経験、読んできたものや食べてきたもので自分ができ上がっている。これから先を生きていく上で毎日の積み重ねが私を作っていくんだと。自分を作っていく、人が生きることがアートなのかなって、ある意味曲解したんです(笑)。

後ろ向きにボートを漕ぐ

――ヨコハマアートサイトにも参加していた団体・AOBA+ARTの活動では、地域住民とアーティストをつなぐ役割をしていましたね。

最初は「あんまりみんなに迷惑かけないでよね」という気持ちもあったんですが、地域からは「これのどこがアートなんだ」といわれるわけ。うーん…って私も説明に困る。でも若い人たちが一生懸命だから、やらせてください」と説得しながら、私も青葉食堂という作品で、おでんを作ったりして。

７年くらい続けたのかな。最後の年にね「AOBA+ARTのメンバーがやりたいといったことに、私は一度も反対せず地域に頭を下げて来たよ。でも最後は『AOBA+ARTがこのまちで活動してくれて良かった』と住んでる人に思われるようなことを企画して」とお願いしたんです。

そこで生まれたのが階段や遊歩道を使う企画。まちにある100段階段にカラーガムテープを貼って階段アートを作ったんですよ。そこは通学路だから、小学生が喜んでくれて「卒業制作で階段アートやりたいから教えてください」って電話がかかってきました。最後には、学校の中に階段アートができて、アーティストも感謝状をもらったりして。うれしくってねえ。最後にみんなに認めてもらって、アートを使ったまちづくりは、あっていいんだなという気がしました。

――「美しが丘100段階段プロジェクト」は、まちづくりの大型助成・ヨコハマ市民まち普請事業にもなり、活動は現在も続いています。

子どもたち、子育て世代をまちに巻き込みたかったんです。「！」っていうモノを発見すると興味をもってもらえるじゃないですか。子どもたちとペンキ塗りしててもすぐ飽きる。でも若いお父さんやお母さんは、子どもなんかそっちのけでずっと塗ってるの。

湖に浮かべたボートを漕ぐように、人は後ろ向きに未来へ入っていく、って言葉があります。目的地に向かって背中を向けて漕いでいくことは、過去を見すえることです。私たちが楽しく暮らしていられるのは、このまちをつくった先輩たちからの贈り物です。お年寄りにとって「街のはなし」は過去と再会する場所だし、小・中学生にとっては、新しい発見の場所ですよね、きっと。50年後、こうやって今の自分たちがいるんだということに思いをいたすきっかけになるようなものが残せたらいいと思うんです。

私は、半径2キロの世界で生活している人間です。視点が狭いと思う人もいるかもしれないけど、この範囲をものすごくよく知ってる人って、実はそんなにいないんですよね。私もまた勉強して、まちとの関わりを深めたいです。

写真選考朗読会の様子

藤井本子さんの事例事業は44ページで紹介しております。

Vol. 26

テーマ

当事者性から始まるアート

Art Lab Ova

スズキクリと蔭山ヅルによるアーティストランの非営利団体。
現在は、多文化な下町にある独立系映画館のとなりにアートスペース「横浜パラダイス会館」を開設しており、近隣のこどもたちに無料で開放するなど様々な人々が交錯する場となっている。

photo：こども

世界を知覚する行為

――横浜下町パラダイスまつりを立ち上げ、現在はその事務局を担っているArt Lab Ova（以下オーバ）は、1996年3月の活動開始から25周年の節目を迎えました。

スズキクリさん（以下クリ）：若葉町に来る前は、桜木町で「13坪のアートセンター」を10年運営していました。利用する人の必然と向き合い、時間と場を共有することで生まれる経験を重視したアトリエを中心としたアートスペースです。雑居ビルの5階だったということもあり、そこを目指して来る人しかいませんでした。現在の拠点「横浜パラダイス会館」でも同様にアトリエも開いていますが、映画館の階下にある路面店なので、飛び込みでいろんな人がやってきます。ですから、若葉町に越してきてまったく状況が変わりました。

――2009年に横浜下町パラダイスまつりを立ち上げた、そのきっかけはどんなことだったのでしょうか。

クリ：2007～08年に滋賀県で「近江八幡お茶の間ランド」という展覧会を企画したことが大きいです。簡単にいうと、アーティストが地域の人たちのところに行って、ある種非日常的な関わりの中で関係を作り、何らかの発展に至るアーティストレジデンス形式のプロジェクトで、わたしたちにとっても興味深い内容で、地元の人たちにも評判が良かったです。だけど僕らは、その後一回もそこに行けておらず、関係を続けられなかった。日常的な営為にアプローチするはずが、結局それらを非日常的に拾い上げるだけで終わってしまったような矛盾を抱えて、何か違うと思ったんです。

蔭山ヅルさん（以下ヅル）：ですから、当初は若葉町でも同様のプロジェクトを立ち上げたいと思ったのですが、アーティストが自分で地元の人に話を持ち掛けても、誰も協力してくれなかったんです。近江八幡では、地元の代表をいくつも掛け持ちしているような人が率先して動いてくれていたので、みなさん協力してくれていたのだとつくづく実感しました。まずは、地元の人々とつながるために、「横浜下町パラダイスまつり」というお祭を開催しようと自治会の役員会議に出席しました。この近隣ですでに大きなアートフェスティバルが開催されていたことで、高齢の役員たちも「アートプロジェクト」という言葉を知っていて、中にはだからこそ「アート」にあまりよくない印象を持っている人もいたんです。そこで、なるべく、小さくて作品らしからぬ作品を展示したり、形に残りにくいワークショップ形式の取り組みなどから始めました。すると、後日、町内会の人たちから「やっていることが目立たなくてとても良かった！」と評価されました(笑)。

――横浜パラダイスまつりに参加するアーティストたちにとって、作品とは何なのでしょう。

ヅル：先日、横浜パラダイスまつりの実行委員たち（＝アーティスト）と、横浜下町パラダイスまつりと、ほかのアートプロジェクトの違いはなんだろうか？という話をしたのですが、横浜下町パラダイスまつりに参加することは「アーティストの休暇のようだ」と答えた人がいました。「作品」を仕上げなくてはいけないというプレッシャーが少なく、リラックスして自分のやってみたいことに自由に取り組めるという意味だと思います。2009年当初は当時の主催者であったわたしたちオーバも含めて、「サイトスペシフィックな作品を作って発表するべき」というスタンスだったと思うのですが、それがだんだん変わってきたんです。例えばアーティストの来島友幸さんは、はじめの何年間かは長年シリーズ化して取り組んでいる自分の作品の展示をしていました。だけどその後、故郷神戸の食べ物「こなもん」や「昭和50年代の小学生の遊び」を主軸にするなど、若葉町にいる人たちに自分のソウルフードを食べてもらったり、今の子どもたちに自分の子ども時代の遊びを教えるようなプロジェクトに変化してゆきました。横浜下町パラダイスまつりは、観客をわざわざ呼び込むのではなく、今偶然ここにいる人たちに向けて企画をしているのですが、今ここにいるアーティスト自身の能動性と当事者性も重視しています。そして、そのような場を必要としているアーティストが、実行委員として残っているのでしょう。

クリ：作品に関する考え方はそれぞれですが、横浜下町パラダイスまつりに関して言えば、個人の作品の集まりではなく、横浜下町パラダイスまつりという作品をそれぞれが意識して作っている様な気がします。

ヅル：オーバとしては、「作品」という枠や、いわゆる「アートワールド」は意識しないようにしています。たとえば、わたしたちオーバも長年発達しょうがいのある人たちと関わってきましたが、「アウトサイダーアート」や「アール・ブリュット」と呼ばれるような世界では、誰かが自分の部屋で作ってきた「作品らしきもの」を本人のニーズの有無に関わらずその部屋から外に出さないと成立しないようになっています。でもわたしたちは、その部屋にあるからこその必然に意味を感じます。その「作品らしきもの」だけを見ること自体よりも、その人やその人の背景や環境や状況と自分たちがどう関わるか？ということや、その過程のほうが重要だと考えています。

クリ：以前、「赤ちゃんお茶会」として、ダンサーと一緒にひたすら彼女の子どもと遊ぶ企画もやっていました。その時に赤ちゃんがモノを投げたり、訳の分からないことをやることは、世界をなんとか知覚しようと必然に駆られてやっている行為なんだと理解しました。「ああ、こういう感じか。これだったらなんとか生きられるなあ」というところで、モノを投げなくなる。僕らがやっていることも、たぶんそういうことなのでしょう。例えば、何でこんなことをやってるんだ？目的は何なのだ？と言われたり、周囲からは不可解に見えるようなこともあるかもしれないのですが、自分たちにしてみると世界を知覚するためで、赤ちゃんがモノを投げるのと同じようなことをやっているだけなんです。目の前にあることを受け止め、どうリアクションしていくかの連続で、それをやり続けることが重要なんだと思います。

リサーチと実験の繰り返し

――コロナ下の横浜パラダイス会館では、どんなことが起こっていますか。

ヅル：子ども食堂的な活動もしているのですが、いまは申請書地獄、報告書地獄ですね(笑)。 コロナ下では、子どもを通じて海外出身の家族の様子が立体的に見えてきました。例えば、中学校の制服や体操着の申し込みや就学猶予の申し込みができていない家庭が多かったので代読や代筆をしたり、親が経営する飲食店の休業協力金を申請したり。休業補償の申し込みをしたいと相談を受けて、給与明細を見たら、月60時間も残業していたのに、残業代が全く支払われていないことがわかったので、労働基準監督署に相談したり。

――アーティストとしての活動なのか、民生委員なのか、もう区別が付きづらいですね。

ヅル：わたしは実際、民生委員でもありますが、アーティストの活動はリサーチと実験の繰り返しだと思っているので、民生委員の活動ともとてもシンクロしています。あまりに多忙なので、もう一つか二つ体が欲しいところですけど。そういえば、明日は三浦市の農家の方が、子ども食堂関係者向けに、無料でキャベツ収穫体験をさせてくれるというので、子どもたちと初めての遠足をする予定です。子どもたちを連れて行くよと声をかけたのですが、親たちも仕事を休んで一緒に行くことになりました。考えてみれば、日本語が読めない人たちにとっては、情報を調べて周遊切符を買うだけでも、とても大変なんですよね。とにかく明日はキャベツ狩り。親も子も、わたしたちも、みんな楽しみにしているんですよ。

Art Lab Ovaさんの事例事業は48ページで紹介しております。

Vol. 26

テーマ

イギリスの歴史から見える社会的排除と現在の日本

横山 千晶
よこやま・ちあき／居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会

現在慶應義塾大学法学部教授。毎週火曜日にスペース「カドベヤ」にてワークショップと食事を共にする活動「カドベヤで過ごす火曜日」主催。地元の住民、地元で働く人たちや学生など、あらゆるバックグラウンドの人々の居場所づくりを目指している。

イギリスの構造的差別とアート

―― コロナ禍、今年のカドベヤの運営はどうでしたか。

去年最初の緊急事態宣言下では、居場所であるカドベヤを閉めていました。そんな中、ひきこもり経験者の青年がメールで「再開するときは、僕が料理を担当したい」といってくれて、そこから今年の活動が本格的に始まった気がします。

身体のワークショップを開始できたのは10月からでした。身体コミュニケーションとは存在を確かめるということだと思うので、動かなくても一緒にいることで生まれるものがある。距離を取ってもできることを模索しました。

―― 横山さんは、19世紀のイギリス文化の研究者です。研究対象が、現代の日本と重なるところも多かったのではないですか。

産業革命に伴い都市集中型になり、公衆衛生にも問題が出てくる。都市化とともに、さまざまな疫病が一気に押し寄せた時期でもあります。失敗を重ねながらもそんな状況を乗り越えていったイギリスの過去から学べることはたくさんあると思います。

そんな新しい社会構造の中で当時のエッセンシャルワーカー、つまり中流階級以上の生活を支えた労働者たちが犠牲になったのは間違いありません。特に本国の飢饉から逃れてきたアイルランド移民や東欧からのユダヤ人移民が劣悪な環境の中で搾取されました。生き抜くために労働者たちは友愛組合や協同組合などの団体を作り、相互扶助の仕組みも作りました。それまであった教会の互助の仕組みでは、移民を支えきれなかったのです。機械化や疫病が機会となり、それまで見えなかった社会問題が引き出される点は、新型コロナウィルスの感染拡大で現代の社会問題が見えてくるのと似ていますね。

インタビューの様子

―― コロナ禍と同時に、黒人への構造的な人種差別の撤廃を訴えるBLM(Black Lives Matter)運動も世界的に大きな話題になりました。

BLM運動はイギリスでも大きな運動となり、植民地の政治家セシル・ローズの銅像が取り外されたり、ブリストルで慈善事業を展開した奴隷貿易商エドワード・コルストンの名を冠した音楽ホールの名称が変更されたりしました。イギリスの歴史とは何かがあらためて問われることになったのです。私のイギリスの友人たちに聞いても、今まで帝国主義の歴史や植民地政策は学校で学んでこなかったという人がほとんどなんですよ。

イギリスは多様性の国です。ロック・バンド、クイーンのボーカリスト、フレディ・マーキュリーの両親はインドのパールシーです。現在のロンドン市長はパキスタン系のムスリム。財務大臣もインド人の祖父を持つ移民3世です。植民地の歴史が今のイギリスを作っているんですね。

そしてイギリスは第二次世界大戦のあと、不足した労働力を補うために英領のカリブ海地域からウィンドラッシュ号という船で多くの移民を受け入れました。しかし、その子供たちは親のパスポートで来ていたために、自分のパスポートや身分証明書がありません。2010年になって不法移民の取り締まりが激しくなると、職を失ったり、国民保健サービスから除外されたり、はては国外退去の憂き目にあったりしたのです（2018年、公式謝罪）。

ストリートアートと社会的排除

―― こういった状況下で、アートはどのような役割を果たせるのでしょう。

2020年5月に著名なストリート・アーティストのバンクシーがサウサンプトン総合病院に《ゲーム・チェンジャー》という絵画を送りました。白人の男の子が人形で遊んでいる絵ですが、今までのヒーローの人形はゴミ箱に捨てられ、今のお気に入りは、女性かつ有色人種の看護師の人形です。ただ、この絵には、どうせこの新しいおもちゃもそのうち捨てるだろう、という含意があるように思います。国民保健サービス(NHS)傘下の病院で働いている医療従事者の国籍は現在200ケ国にも及びます。多くは旧植民地から来た人々です。コロナ禍で最初に犠牲になったのは、こういった旧植民地から来た人たちです。バンクシーの風刺はその点にあるのですね。この絵は3月23日にオークションにかけられることになっており、その収益をNHSに全額寄付すると表明するなど、アーティストたちもコミュニティの問題にみんなの目を向けようとしています。

―― 社会的排除にどうやって抵抗するかの模索が続いているように見えます。

貧窮者支援の拠点、トインビー・ホールの芸術教育の拠点として1901年に開いたホワイトチャペル・ギャラリーは、ロンドン自治区にある公営アート・ギャラリーとして活動を続けています。この界隈は昔から移民のまちで、東欧のユダヤ系の人たちが支援団体を作り、若者を育てるという気風もありました。多様性を受け入れてきた場所なのです。ピカソの《ゲルニカ》が1938年にイギリスで最初に展示されたのもこのギャラリーでした。同時にトインビー・ホールのあるイースト・ロンドンは今ではストリート・アートの町としても有名です。2012年のオリンピックの際にはこの界隈の再開発に反対したストリート・アートも描かれ、区議会に塗りつぶされるというせめぎあいもありました。アートは社会的排除に抵抗し、コミュニティを巻き込むツールなんですね。

―― パブリック（公共性）とは何かを考え続ける必要もあります。

パブリック、とは行政の傘下にある、ということではなく、外からより良くすることだと思います。行政からお金をもらってるから何も言えないのはおかしい。「反対意見も言いますよ」という態度こそ、真の公共性です。そこから話し合いの場を設けること。それこそ、開かれた創造的なパブリックにつながるのではないでしょうか。

カドベヤのお茶会

横山千晶さんの事例事業は8ページで紹介しております。

採択事業一覧

■・・・コミュニティアート　■・・・アートフェスティバル　■・・・アートプロジェクト

	事業名	団体名	開催区	採択額(円)
1.	会社まるごとギャラリー2020	アーティストネットワーク ＋コンパス	金沢区	700,000
2.	アート・フォー・コミュニティ ～アートが人と地域コミュニティをつなぐためのステップ事業～	NPO法人あっちこっち	中区	560,000
3.	あいさつシリーズ Vol.2 浜マーケットからこんにちは	磯子区障害者地域活動ホーム	磯子区、金沢区、南区、港南区	500,000
4.	カドベヤ・オープンＤＡＹ―つどおう・かたろう・つながろう	居場所「カドベヤで過ごす火曜日」 運営委員会	中区	500,000
5.	We Trees 鶴見 The Base	WeTT 実行委員会	鶴見区、中区	800,000
6.	大岡川アートプロジェクト「光のぷろむなぁど2020」	大岡川アートプロジェクト 実行委員会	南区	275,000
7.	おとむすび「トークショー」	音楽スペース　おとむすび	泉区	170,000
8.	黄金町BASE	黄金町BASE	中区	800,000
9.	ことぶき「てがみ」プロジェクト	ことぶき「てがみ」プロジェクト 実行委員会	中区	592,300
10.	さかえegaoフェスティバル	さかえegaoプロジェクト	栄区	300,000
11.	性暴力サバイバー　ビジュアルボイス	STAND Still	青葉区	624,200
12.	広げよう！深めよう！！水彩でアートの輪!!!	蒼昊美術會	中区、西区	231,000
13.	こころに響く打楽器作っちゃお♪	ＮＰＯ法人 打楽器コンサートグループ・あしあと	南区、中区、青葉区、泉区、金沢区、 栄区、都筑区、戸塚区、保土ヶ谷区	1,500,000
14.	パラダイスから遠く離れて～土地の記憶に刻まれるアート～	都筑アートプロジェクト	青葉区、緑区	920,000
15.	「ティーンズクリエイション2020」	ティーンズクリエイション 組織委員会	栄区	200,000
16.	東横フラワー緑道映像ワークショップ	東横フラワー緑道フェスタ 実行委員会	神奈川区	250,000
17.	トーキングキッズハイファイブスクール！ “しゃべろう、うたおう、おどろう、つくろう！”	TalkingKidsHi5	中区	210,000
18.	Picture This 2020: 横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト	Picture This Japan	中区、南区	1,300,000
19.	未来に繋ごう、皆んなの!! 横浜の!! 歴史・文化・芸術!! ～朽ちていく、再生、修復～	特定非営利活動法人 美術保存修復センター横浜	中区	250,000
20.	病院と地域とアートでつくるおまつり	病院と地域の協働によるおまつり 実行委員会	神奈川区、西区	150,000
21.	演劇ワークショップ（採択辞退）	ＮＰＯ法人ぷかぷか	緑区	1,200,000
22.	本牧こどもディスコseason6	本牧こどもディスコ実行委員会	中区	387,500
23.	「街のはなし」	「街のはなし」実行委員会	青葉区	300,000
24.	ロケ地で映画を鑑賞しよう！！聖地巡礼上映会 『1999年の夏休み』in大倉山記念館&『風のある道』in神奈川県立音楽堂	横浜キネマ倶楽部	港北区、西区	320,000
25.	横浜下町パラダイスまつり2020＋よこはま若葉町多文化映画祭2020	横浜下町パラダイスまつり 実行委員会	中区	1,760,000
26.	全国ミニシアター地域交流上映会　横浜×尾道	横浜シネマネットワーク 実行委員会	中区	300,000
27.	若葉町ウォーフ「まちなかギャラリー2020」	一般社団法人横浜若葉町計画	中区	800,000
28.	LITTLE ARTISTS LEAGUE YOKOHAMA ～アートを通してグローバル思考を育むプログラム～	LITTLE ARTISTS LEAGUE	中区	600,000

※2020年5月29日、採択時の情報です。

横浜市地域文化サポート事業
ヨコハマアートサイト2020実施レポート

2021年3月31日発行
発行：ヨコハマアートサイト事務局（認定特定非営利活動法人ＳＴスポット横浜、横浜市文化観光局、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）、編集：認定特定非営利活動法人ＳＴスポット横浜、編集協力：本のモ・クシュラ、デザイン： 小池佑子、印刷・製本：共進印刷株式会社

ヨコハマアートサイト事務局　〒220-0004　横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル208（認定特定非営利活動法人ＳＴスポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL：office@y-artsite.org　URL：https://y-artsite.org/
TwitterID：@Y_Artsite　Facebook: https://www.facebook.com/yokohama.artsite/